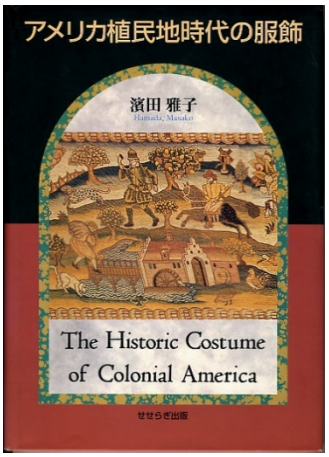
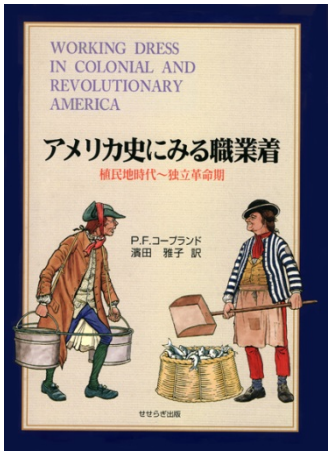
濱田雅子の服飾講座
「服飾から見た生活文化」シリーズ報告集
2016

編著　　濱田雅子・児嶋きよみ





本講座の主催者

本講座の主催者は、児嶋きよみ（敬称略）主宰のOffice Com Juntoである。

連絡先：Office Com Junto　主宰　児嶋きよみ

〒621-0815　亀岡市古世町1丁目２－４１

E-mail ： kiyomi-kojima@gaia.econet.ne.jp

Tel:0771-23-6579

携帯電話 ： 090-5675-6572

※但し、第１回から第３回のみNPO法人京都生涯教育研究所が共催

口絵

講座１　口絵１　　講座２　口絵２

口絵１　ポルトガルのオウテイロの農夫の妻の晴れ着。黒を基調とした布地のスカートと豪華な刺繍が施された前掛けである。オヴァール博物館蔵。

口絵２　フランスのシャルル・ド・シャティヨン・ブロア伯爵のプールポワン。14 世紀半ばごろ。プールポワンは刺し子仕立を意味する。元来は兵士が護身に用いていた胴着であった。この遺品は男子服の初期のもので、クリーム色の錦織製である。ボタンホールと織物の紋章の柄（ライオンと鷲）が注目される。　リヨン織物史博物館

講座３　　口絵３

口絵３　南蛮屏風における黒人奴隷の存在は視覚的に見逃しがたい。なにより、かなりの人数が描かれている。大阪南蛮文化館と神戸市立博物館の 2 本では、それぞれに描かれた黒人数は 3 割を越える。大阪南蛮文化館所蔵品　136 人中 41 人。神戸市立博物館所蔵品　218 人中 67 人。
南蛮屏風　右半隻　大阪・南蛮文化館蔵。
岡本良知、高見沢忠雄共著『南蛮屏風』（鹿島出版会、1970 年版）

講座４　口絵４　　口絵５

口絵　4,5　フランスからアメリカにもたらされたドレスは、ぴったりと締められたコルセットの上に着用され、上流人らしい女性の体型を形作った。この衣装の型紙は、男性のコートやウエストコートと同じように、肩を後ろに反らせて振る舞えるように作られていた。18 世紀の婦人たちは、その上体を逆円錐形に形づくるために、入念に体に合わせたコルセットをつけていた。
スミソニアン研究所蔵

講座５　　口絵６

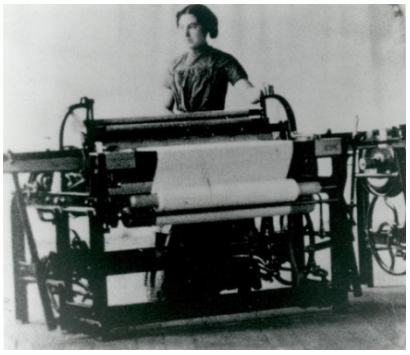
口絵６　農夫はホームスパンのジャケットとウェストコー トとズボンを着用し、小さな円いフェルト帽を被り、オズナブルグの亜麻布製のエプロンをかけ、インディアンのモカシンをはいている。彼の妻は男もののフェルト帽を被り、シュルトゥー を着て、スカートの上から亜麻布製のエプロンをかけている。
出典：　Copeland, *Everyday Dress of the American Revolution.*
コープランド著、濱田雅子訳『アメリカ史にみる職業着』（せせらぎ出版、1998 年）p.53.

講座６　口絵７　　口絵８

口絵 7,8　この写真はコロニヤル・ウィリアムズバーグ振興財団 DeWitt Wallace Gallery of Decorative Arts 所蔵のイギリス製のお仕着せのコートである。ヴァージニアにもたらさられ、御者など上級の白人の召使と黒人の召使によって着用されていた、と考証されている。このコートは主人のものと形は変わらないが、興味深いことに、そこには、召使であることを象徴するいくつかの装飾的要素が見られるのである。上質のウール製で、召使いの主人の紋章の色である緑と赤の 2 色使いで粋に配されており、裏は綾織のウーステッド製である。緑のブロード・クロス地に赤の衿とカフスが付けられ、金糸や銀糸で織られた入念な縁取りが施されている。ボタンの紋様は架空の動物であり上半身は馬で、下半身は人魚の尾である。馬のように働け、働けと使用人に労働を強いる悲哀を感じさせる紋章である。

講座 7, 8　口絵９

口絵９　アメリカのファッションに革命を起こすことを断念したデュポン夫人であったが、ただ一度だけ書簡の中で「革命は成功しました」（1800 年 12 月 20 日）という言葉を残している。それは髪型について述べているところである。1798 年にはすでに髪粉をふったかつらを放棄していたデュポン夫人は、自分自身の短髪を上手に晒し、さらに毎日洗っていた。「20 分で化粧が出来る」（1800 年５月６日）という。簡単で快適なこのヘアスタイルは、アメリカの女性たちから、固執していたかつらと髪粉とを放棄させて、デュポン夫人は「全女性の羨望の的」（1800 年５月６日）という名誉なことになったのである。濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）p.130。



講座９　　口絵 10

口絵 10　力織機で働く工場の少女　1849－50 年
工場での作業用に着られていた「工場服」は暗色（多くの場合は黒）の洗えるコットン製で、時にはキャラコやチンツのものもあったことがわかっている。また、腕を動かしやすくするとともに袖が機械に巻き込まれないよう、袖は短かったと推定される。
The Museum of American Textile History 蔵。
Joan Severa, *Dressed for the Photographer, Ordinary Americans and Fashion 1840-1900,* Kent State University Press, 1995, p. 65.

講座 10　　口絵 11

口絵 11　19 世紀の西部開拓時代の横穴式住居の内部。ホームステッダーたちは地面に穴を掘り、穴の周りに泥で塀を作った。ミネソタの Walnut Grove のプレーリーには、当時の横穴式住居のレプリカが作られている。内部にはストーブやキルトのカバーが掛けられたベッドや椅子やテーブルが備えられていた。ローラ・インガルス・ワイルダー家の横穴式住居を彷彿とさせてくれた。
撮影　濱田雅子　2007 年 3 月

刊行にあたって

濱田雅子
元武庫川女子大学教授
アメリカ服飾社会史研究会会長

濱田雅子の服飾講座「服飾からみた生活文化」シリーズは、児嶋きよみさんが主宰をされている Office Com Junto 主催の Global Session の講座の一環として、2013 年 10 月 13 日から開催されてきた。１年に３回開催され、2016 年 11 月 20 日で、第 10 回を迎えた。本報告集は、10 回を節目としてまとめたこの講座の記録である。Global Session については、児嶋さんの「刊行にあたって」にあるように、ゲストスピーカーの報告とディスカッションは英語で行われている。それに対して、濱田の講座は日本語で行なっている。巻末の濱田の略歴にある著作は、英語文献を読んで研究した内容と、現地でフィールドワークした調査結果に基づいて書いたものである。

本講座は濱田の研究内容を参加者の皆さんに、パワーポイント（写真資料や解説）や配布資料を用いて、ヴィジュアルにわかりやすく語らせていただき、ディスカッションをするという形式で行ってきた。時折、濱田が研究に用いた英語の資料を参加者の皆さんと講読する機会を設けさせていただいた。報告書の目次にあるように、ポルトガルの民族衣裳に始まり、アメリカの服飾史を中心に、かなり専門的なテーマを扱っている。濱田のアメリカ服飾史研究の特色は、上流階級から下層階級にわたる服飾社会史研究を成していることにある。このような立場で、先住アメリカ人やアフリカン・アメリカンや中産・下層階級の衣服研究に 1981 年以来携わってきたのだが、本講座でも参加者の皆さんから、このような方法論に注目していただいてきた。参加者数は数名から 20 名の範囲に及び、服飾研究者に限らず、多方面にわたっている。

本報告集は児嶋さんがメーリングリストでご案内下さった案内文（児嶋きよみ・濱田雅子の合作）とセッションのあとで、児嶋さんと濱田がまとめたレポートを元に、濱田が編集して作成したものである。文責は報告書の回ごとに明記した。すべて濱田の手作りで、製本はとじ太くんを用いた。このような報告書の刊行は、当初は頭になかったため、案内文もレポートも形式が不統一であるが、重複は避け、可能な限り推敲し、体裁の統一をはかるべく努めた。口絵には講座ごとに写真 1～2 枚と解説を掲載した。この口絵からお入りになり、ご興味のおありのページからお読みいただくのも本報告集への一つのアプローチ法ではないかと思う。本報告集が参加者の皆さんのお役に立てば幸いである。

このような講座をここまで継続できたのも、ひとえに児嶋きよみさんのお陰と感謝の念に堪えない。場所の確保、参加者の皆さんへの案内の送付、レポートのまとめ、これらのことを持続するのは、並大抵のことではない。今後、引き続き本講座を続けさせていただきたく、児嶋さんはじめ、参加者の皆さんのご支援をお願い申し上げたい。

刊行にあたって

児嶋きよみ
Office Com Junto 主宰

濱田雅子先生の服飾講座「服飾からみた生活文化」シリーズは、Office Com Junto という児嶋の主宰する NPO のプログラムのひとつである Global Session の一環として、2013 年 10 月から開催されてきた。これは、主に、英語で行われるセッションであり、ゲストスピーカーとコーディネーターが、あらかじめ送付されたゲストの英文エッセーを基に、対話を始める。参加のルールは２つあり、ひとつは「黙って聞いていてもいい」であり、もうひとつは、「どこから対話に介入してもいい」である。このルールを保持したまま、濱田先生の講座は、日本語で行われて来た。この Global Session（GS）は、当時の運営母体であった(財)亀岡市交流活動センター(亀岡市外郭団体)の市民向けの英会話講座のひとつとして 1999 年に開始され、児嶋の退職後はこの GS の運営を委託され、今日に至っている。2016 年 12 月の GS で、293 回目を数えている(概ね月に 1 回開催)。この間、ほとんどの会でお知らせと同時にレポートを作成し、参加者の思いを伝えて来た。

さて、「服飾からみた生活文化」シリーズを改めて見直してみると、さまざまな国の生活文化をたどりつつ、日本文化との対比がなされていることがわかる。まず、ポルトガルを訪ね、19 世紀の庶民の民族衣裳が地域別に取り上げられる。次いで、貴族様式が衣服でも幅を利かせていたヨーロッパ（16~18 世紀）の服飾文化を概観した上で、アメリカの歴史へと踏み込み、1600 代から 1700 年代の服装をたどる。次に日本に 16 世紀後半に渡来した南蛮人と日本のファッション革命に目が向けられる。第 1 回講座でのポルトガルが大航海時代に入ったころの日本の様子が南蛮屏風から読み取れる。次にアメリカ独立革命期（1773～1789 年）の簡素化されてゆく上流階級の衣服と庶民服がとりあげられる。

セッションの中の対話では、「アメリカでは、労働者の賃金が高く、ヨーロッパよりも質の良い服を身に着けていた」こと、「18 世紀アメリカでは公衆衛生が進んでいた」こと、「フランスのトイレ事情」などが話題にされている。また、下層の奴隷の衣服の実物は全く残っていないので、「逃亡奴隷広告」の被服描写に目をつけた濱田先生のアイディアが述べられる。また、アメリカ植民地在住のフランスに繋がるふたりの上流階級の婦人同士の書簡にも着目している。

さらに、対話では、「ヨーロッパからの植民者はヨーロッパ指向が強かったが、1930 年代以後の恐慌後、フランス製品が入ってこなくなり、アメリカンスタイルの誕生となった」ことが語られる。GS の内容や対話については、枚挙にいとまがない。講座のテーマと内容、対話の内容については、本報告集お読みいただきたい。さらに、ご興味のおありの方は、巻末の濱田先生の略歴に掲載されている著作や翻訳書をお読みいただくことをお勧めする。

この講座は、知らないことの多さを知り、また知ることの楽しさに気付く旅のようなものであるといえよう。濱田雅子先生の知の旅に、今後も伴走させていただきたいと考えている。これまでの楽しい講座に感謝するとともに、今後の知の旅をよろしくお願い申し上げる。

目次

シリーズその１…… P. 6

ポルトガルの民族衣裳の地域別特性

シリーズその２…… P. 12

アメリカ植民地時代の服飾

シリーズその３…… P.18

南蛮服飾を通してみた東西文化の交流

シリーズその４…… P. 27

服飾を通して見たアメリカ人意識の形成
―アメリカ独立革命期を舞台として―

シリーズその５…… P. 34

アメリカ史にみる職業着―植民地時代～独立革命期

シリーズその６…… P. 45

小説『ルーツ』のなかのクンタ・キンテの服装をめぐって

シリーズその７、その８…… P. 52

フランス・ファッションのアメリカへの伝播

シリーズその９…… P. 61

19 世紀アメリカ、ローウェル工場の女子労働者の日々と衣生活

シリーズその 10 …… P. 67

19 世紀後半北アメリカ西部開拓時代の衣生活
ーミネソタの大草原の小さな家を訪ねてー

濱田雅子の服飾講座
「服飾から見た生活文化」シリーズ　その１
2013年10月　Global Session（第　　回）

期日：2013 年 10 月 13 日　1:30～3:00

場所：京都市国際交流会館　地下鉄蹴上げ駅より 5 分

タイトル：ポルトガルの民族衣裳の地域別特性

講座のご案内

ポルトガル人が初めて日本に来た時代がいつだったか知っていますか？

1543 年、種子島へポルトガル商人が漂着（鉄砲伝来）したことが日本へのポルトガル人の最初の上陸であったとされています。そして、1549 年にはフランシスコ・ザビエルが日本を訪れキリスト教布教活動をはじめ、1639 年の第 5 次鎖国令でポルトガル船の入港を完全に禁止するまでのおよそ 100 年間は、南蛮貿易をはじめ、西洋文化が大きなうねりとなって来ていたようです。

なぜ、ポルトガルは大航海時代の先駆けとなったのか？どうぞ、考えて見てください。

濱田雅子先生はアメリカの服飾史の専門家ですが、ポルトガル、スペイン、フランス、イギリス、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ノルウェー、ブルガリア、イタリヤのサルデーニャ島、ロシア、中国、台湾、韓国などの歴史衣裳や民族衣装も現地に赴いて、調査されています。今回は、ポルトガル全土の民族衣裳について、地域別に歴史や気候・風土を踏まえて語っていただきます。

以前の皆さんへのアンケートで、「知らないことを知る楽しみ」をこのグローバルセッションで挙げた方が、とても多かったのですが、今回は英語のセッションではありませんが、驚くことばかりです。

是非、京都の蹴上げにおいでください。知の楽しみが増えることは、保証します。

（文責　児嶋きよみ）

本報告は、濱田が 1989 年 8 月～9 月にかけて行われた第 8 回国際服飾学術会議とポルトガル服飾文化学術調査旅行で収集した調査結果、および 2000 年 10 月 2 日から 8 日に行われた ICOM（International Council of Museums：国際博物館会議）の服飾委員会服飾会議と研修旅行で収集した資料を中心に、1994 年に麻布美術工芸館で行われたポルトガル民族衣裳展で展示された民族衣裳の写真を紹介しながら行ないます。

第８回国際服飾学術会議とポルトガル服飾文化学術調査旅行[1989 年 8 月 18 日～9 月 3 日]（国際服飾学会主催）は、天正遣欧使節団の足取り（リスボン→コインブラ→バターリャ→シントラ→リスボン→エヴォラ→ヴィラ・ヴィソーザ）をたどって行われました。現地の写真を紹介・解説いたします。また、ファドの女王、アマリア・ロドリゲスの哀愁をおびたファドも現地で入手した DVD でお聴きいただきます。

下に掲載した写真は、本講座で紹介する 1994 年に麻布美術工芸館で行われたポルトガル民族衣裳展で展示された民族衣裳の写真の一部です。

麻布美術工芸館衣裳展　1994 年 6 月 11 日～26 日

（文責　濱田雅子）

講座のレポート　その１

参加者(敬称略)
池田佳代（東京から）、元井めぐみ、谷　紀子、冨士谷あつ子（特定非営利活動法人京都生涯教育研究所副理事長）、鈴木雪弥、岩倉由美、小西、沼岡南(新潟から）、杉村紳爾、足立茂、上杉孝實、藤田晴己、藤田宗次、亀田博、楠見静子、藤原翠子、梁　兼翔、高橋和枝(新潟から）、濱田雅子、児嶋　以上 20 名

濱田雅子先生は、武庫川女子大の教授でしたが、すんなりと大学内だけの道を上って来られた方ではなく、神戸大学で西洋史学を専攻後、2 年間、高校教員を務められ、その後、神戸大学で、３年半助手をされていたのですが、結婚後、各地に家族で転勤し、その間、文化服装学院の通信教育で洋裁を学び、洋装店でオーダーメイドの服つくりやプレタポルテのパターンメイキングや裁断・縫製の仕事についていたそうです。パリの縫子さんの仕事ぶりなどを知り、将来は西洋服飾史学を学ぼうという夢をそのころから持たれていたようです。その後、夢が現実となり、大学院で修士を取得され、教授となられてから博士（家政学）を取得された方です。今も非常勤講師として、「映像で学ぶ西洋服飾史」「服飾からみた生活文化」「パリモードからアメリカンモード」と題する講義科目、および「創作デザイン実習」という実習科目を担当されていて、学生たちからは大きな信頼を得ておられるようです。

濱田雅子先生のプロフィールについては、「アメリカ服飾社会史研究会」の下記のサイトをご覧下さい。

http://american-mode.com/profile/

参加者の自己紹介

杉村紳爾：(縦糸の会）和服を着て歩いていると、「刀をさせ」と言われる。和服はスカートで「男にスカートをはかせる会」というのもつくっている。和服はシンプルでほどいたら、元の形に戻る。今の時代に合う和服を指導している。華頂大学で 12 月 14 日に発表がある。

高橋和枝：新潟から来た。Global Session は、いろんな人の考え方を知る交差点のようで、参加するのが楽しい。

谷　紀子：西洋ファッション史の研究者でアメリカ女性が「スカートからパンツへ」着方を変えたことなどを現在研究中。

岩倉由美：ビーズ織り作家で、12 月 14 日からパリのルーブル美術館で作品が展示予定

足立茂：スケッチなどで培われた技術を、京友禅の伝統を生かし着物、帯、小物などにとり入れたものを創作している（伝統工芸士　京友禅）。

冨士谷あつ子：NPO 法人京都生涯学習研究所副理事長。評論家。

まだまだいろいろなことをされている方々がお集まりでした。

以下に、セッションの内容の一部を紹介します。

濱田：ポルトガルという国のイメージはどのようなものをお持ちでしょうか？ヨーロッパのまずしい国とか、公園で寝泊まりする人もいるような貧困層の目につく国というイメージでしょうか？観光客の目で見ると、”現実を知らない 17 世紀を回顧する国民”とも言われています。大航海時代にブラジルに漂着し、1500 年から 1808 年までは、ポルトガルは、ブラジルを植民地にしていました。ポルトガルでは管理職に就いている女性が多く、実際にポルトガルを訪問したとき、館長さんは女性でとても恰幅が良く、男性のお供をしたがえていました。ただ、着ている服はいつも同じでした。

亀田：ガイドとして何回か訪問しましたが、貧富の差は大きいです。サッカーがブームでサッカー選手のひとりは、大きなリゾートマンションに住んでいると聞きました。外国に行って認められるケースが多いようですね。ボルトワインやタイルなどは有名ですが、輸出できる物があまりないのかもしれません。素朴で質素な感じで、スペイン人と比べると人柄はやさしいですね。日本の昔の良いところが残っているような。ツアーで行くとおもしろいところがたくさんあります。食べ物は、いわしの炭焼きとか、リゾット・蛸・エッグタルトなど。直行便はないが、11 月や 12 月も暖流の影響で暖かくいつでも行けるところです。

池田：デジタルでショートムービーをつくったり、自分史をつくる講座を開講しています。グァテマラに行って語ってもらって 3 分の動画をつくる講座をしたこともあります。衣装については、「なぜあの衣装を着ているのか」という視点でみると、衣装は大事なメディアだと思います。暮らしを映していると思うので。日本の着物は堅苦しいと思っていたのですが、京都にいると身近なところで関わっている人もいて、考えが変わってきました。

（文責　児嶋きよみ）

講座のレポート　その２

１．概要

本報告は、本講座のご案内にもありますように、1989 年 8 月～9 月にかけて行われた第 8 回国際服飾学術会議とポルトガル服飾文化学術調査旅行で収集した調査結果、および 2000 年 10 月 2 日から 8 日に行われた ICOM（International Council of Museums : 国際博物館会議）の服飾委員会服飾会議と研修旅行で収集した資料を中心に、1994 年に麻布美術工芸館で行われたポルトガル民族衣裳展で展示された民族衣裳の写真を紹介しながら行いました。

第８回国際服飾学術会議とポルトガル服飾文化学術調査旅行[1989 年 8 月 18 日～9 月 3 日]（国際服飾学会主催）は、天正遣欧使節団の足取り（リスボン→コインブラ→バターリ

ャ→シントラ→リスボン→エヴォラ→ヴィラ・ヴィソーザ）をたどって行われました。現地の写真を紹介・解説させていただきました。また、ファドの女王、アマリア・ロドリゲスの哀愁をおびたファドも現地で入手した DVD でお聴きいただきました。

２．ポルトガルと日本の関係

ポルトガルは、私ども日本人にとって最も親近感のある国の一つです。なぜなら、近世初頭に展開された大航海時代に、彼らは西の文化を初めて、日本に紹介するという偉業を果たしたからであり、いわゆる南蛮人の珍客によって、日本人はまさにカルチュアショックを受け、覚醒させられたからです。日本語になったポルトガル語として、例えば、カステラ、ボタン、襦袢などがあり、ポルトガルの文化は日本人の身近なところにあります。また、天正遣欧少年使節団はヨーロッパ訪問時に、ポルトガルを訪問しています。

世界制覇の勢いをもって飛翔し、自国の歴史を派手に彩ったポルトガル人は、反面、素朴で親しみ易く、情感豊かな国民性をもっているようです。このように世界史に際立った足跡を印したポルトガル人ですが、衣裳についてはあまり知られていません。日本の国土の 4 分の 1 という小さい国ですが、風土の多様性が特色で民族服の形態を大きく左右してきました。それゆえ、民族衣裳の研究対象としても注目されています。

３．ポルトガル民族衣裳展

そうした中で、1994 年、駐日ポルトガル大使館から国際服飾学会に対して、民族衣裳展に関する要請があり、積極的な協力のもとに、麻生美術工芸館において、「ポルトガル民族衣裳展」が実現しました。

所蔵者オヴァール博物館の館長ご夫妻が来日されて、ポルトガル・ナショナルデー（6 月 10 日）をオープニングとして、予想以上に見事な展覧会が開催されました。生活との関連性の明快さ、素朴な芸術性など、目を見張るものがあり、これを記録として残したいという学会役員の意図が結晶して、このスライドが実現しました。撮影、解説、すべて手作りです（口絵１）。

４．ポルトガル共和国大使のご挨拶　　ジョアン・サルゲイロ氏

ポルトガルは大きな国ではありませんが、風土の多様さは決して他の国にひけをとりません。衣裳の地方ごとのバラエティーの豊かさはそのことの何よりの証です。本当にポルトガルでは北部から南部に行くに従って文字どおり刻々と風景が変化し、人間の性格も変化し、当然のことながら衣裳も変化してゆきます。こうした衣裳の地方的多様性こそがポルトガル人の人間らしさ、ポルトガル人の心の豊かさを生みだす源のひとつであるに違いありません。北はミーニョ地方からアルガルヴェ地方に至るまで、さらには大西洋のアディラ諸島やアソレス諸島に至るまで、むろん言葉はポルトガル語ではありますが、地方ごとの変化はまるでその訛りの変化に歩調を合わせているかのようです。

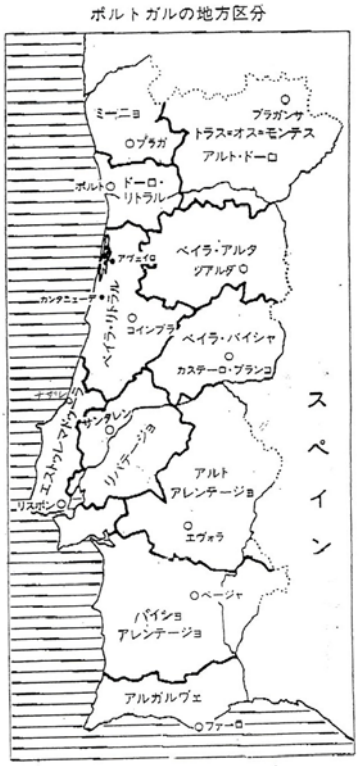
５．オヴァール博物館館長のご挨拶　ジョゼ・アウグスト・デ・アルメイダ氏

本展示でご紹介するおよそ 33 の衣裳はいずれもポルトガルの 14 県、ならびにいくつかの自治州の衣裳文化を代表するものばかりですが、ご覧になって明白であるとおり、わが国における衣裳の地方差は決して小さくありません。他方近年とみに難しくなっているの

はこうした伝統衣裳の収集であります。それにはこんな背景があります。かって両親は子供たちにこう言い残して世を去るものが多かったのです。いわく私たちは結婚式当日に着た衣裳を着けて埋葬されたい。さもなくば土地の最も大きなお祭りの時に着た衣裳を着けてあの世に行きたい、と。このようなわけできわめて多くの伝統衣裳が失われてしまいました。特に女性用の衣裳は、今日ではオリジナルの点数が非常に少なく、復元したくとも、それがほとんど不可能になってしまっています。虫害によって壊れてしまった衣裳もありますし、その他の理由でせっかくの貴重な民俗資料がむざむざ失われてしまった例は数しれずといってよいのです。

６．対象地域

1) ミーニョ地方
2) トラス・オス・モンテス地方
3) ドウロ・リトラル地方
4) ベイラ・リトラル地方
5) ベイラ・アルタ地方
6) ベイラ・バイシャ地方
7) エストゥレマドゥーラ地方
8) リバテージョ地方
9) アルト・アレンテージョ地方
10）バイショ・アレンテージョ地方
11）アルガルヴェ地方
12）アソーレス諸島
13）マディラ島
14）マカオ



コビリャンの羊飼い　1890年
昼となく夜となく、羊の群れを世話し杖を使って狼の害から守った。 オヴァール博物館提供

ヴァリーナ（オヴァール）1930年
街角で魚を売る女。一日に10km以上を、裸足で歩きまわった。
オヴァール博物館提供

（文責　濱田雅子）

濱田雅子の服飾講座
「服飾から見た生活文化」シリーズ　その２
2014年2月　Global Session（第　　回）

日時：2014 年 2 月 23 日（日）　10:30～12:00
場所：京都府国際センター　京都駅ビル 9 階　　参加費：600 円
(JR 京都駅南北自由通路伊勢丹百貨店南エレベーター利用)
Tel & Fax 075-342-5000

タイトル：　アメリカ植民地時代の服飾

講座のご案内

アメリカ服飾史の研究書は欧米にも僅少であり、まして、日本では濱田雅子著『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996 年）の出版に至るまでは皆無に等しかったといえるでしょう。本書は濱田の修士論文です。本講座の準備にあたって、本書を手に取って構想を練りにかかりました。最初に目に留まったのが、私の修士論文、および博士論文の指導教員の丹野郁先生が本書に寄せて下さった序文です。

「16 世紀のルネサンス期を契機として、服飾文化は飛躍的に発展する。18 世紀のロココ様式までの三世紀はヨーロッパでは貴族様式が幅を利かせ、最高の技術をもって美の極致として賞賛される。
ところで、私共がヨーロッパの服飾の発展過程に、目を奪われている間に、アメリカが歴史に登場する。彼らの植民地時代の服飾は、当然、祖国ヨーロッパの貴族的な装いを採り入れたであろうが、果たしてどうであったのか。また、その後の発展はどうか、など、興味をひくところである。アメリカは、急速に近代化の道を進みつつ、大量生産、既製服、ファッションの面でも、世界をリードするまでのパワーをもつに至った。
植民地時代の生活の様相こそ、本書が明確に答えてくれるであろう。」

本講座では本書のハイライトである第二章を中心に、アメリカ植民地時代の衣生活の様相をお話しさせていただく所存です。演者は本書の執筆に当たって、文献の渉猟はもとより、再三再四現地調査により、遺品を確かめました。

本講座の全体構成は以下のとおりです。
１．ヨーロッパの背景と服飾
２．ヴァージニア植民地の建設と服飾

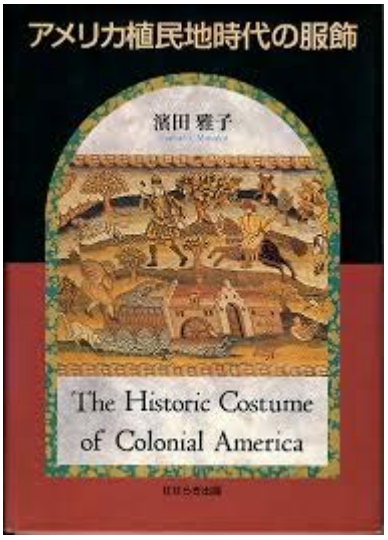
３．ニューイングランド植民地の建設と服飾
４．ニュー・ネザーランド植民地の建設と服飾

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

最近は、大学を終え、すぐ大学院に入り、数年を経て博士論文を書き上げても、その後大学などでの研究者としての仕事場が充分でないことが問題になっています。けれども、濱田雅子先生は、43 才で武庫川女子大の大学院家政学研究科に入学し、その修士論文で書いた論文「アメリカ植民地時代の服飾の歴史的考察－ヴァージニア・ニューイングランド・ニ　　ューネザーランドの場合－」を基に下記の本を出版されました。

その後も研究を続けられ、博士論文を基に、『黒人奴隷の着装の研究』（東京堂出版, 2002 年）を出版されています。大学院に入学前には、高級婦人服洋装店で縫い子をしたり、アパレルメーカーで、パターンメーキングや見本縫いをしたりしながら、日本のすばらしい技術を実践で確かめて来られたのです。



①濱田雅子著『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996年）

Q：ルネッサンス時代と聞くと、どのようなイメージですか？

A：華やかなイメージですね。

写真では､男性も首に襞のあるものを巻いていますが、これは、布を糊付けし、コテを用いて８の字型に留められています。カギホックが無い時代なので、首に巻いて紐でくくります。ルネッサンス時代の男女の衣裳の特徴は、袖や身頃に詰め物が入っていることです。よく見ると、袖は身頃から切り離されており、紐でつなげてエポーレットという肩飾りで覆っているのです。ズボンは半ズボンでベルトが無い時代なので、上着に穴をあけて、ズボンに付けられた靴紐のような紐を通してくくりつけていました。

Q：手洗いはどうしたのでしょうか？

半ズボンを脱いだりはいたりが一人ではできないので、おむつのように中に藁くずを入れていたそうです。1589 年には、スペインで裁断書が作られています。ボタンホールももちろん、手かがりで、すべて手縫いです。紋章のついた衣裳は出身を示し、袖と腹などには、麻くずを

②ある紳士の肖像

③エリザベス1世女王

入れて、詰物を詰めています（口絵２）。1600 年代に英国で即位したジェームズ 1 世はあまり、おしゃれに気を配らなかったとのことです。30 年戦争時には、騎士の服装においては､動きやすいように、詰物が取り出され、靴もブーツが出て来ました。衣服は鎧の下に着るので、寒さを防ぐのと、動きやすさが求められるようになってきたのです。ルネッサンス時代には男子服にも女子服にもビロードが使われていました。

日本の南蛮貿易が盛んになってきたのは、信長や秀吉の時代（16 世紀）ですが、南蛮屏風では、秀吉も襞のある服を着て描かれています（江戸幕府設立 1603 年）。
女性の服もスカートの中には柳の枝を通し穴に通して作られたヴェルチュガダンというペチコートなどを身に着けていました。ヨーロッパでもそれぞれ、形がちがいます。スペイン（円錐形）、フランス（鳥かご形）、英国（ドラム形）など。その後、鋼鉄製のコルセットなどが導入されました。

Q：どうしてそのようなファッションがはやったのでしょうか？

男子が鎧を身に着けるように、女性服にも鎧のように護身の目的があったのかもしれません。コルセットには腰回りが 37cm のものも残っています。女性の浮気防止という説もあります。のちに鯨ひげもコルセットに使われています。ウェストを細くするために、肋骨を切ることもあったようです。女性の靴も動きがとれないように、25cm の高さのチョピンという靴が残されていて、よろけながら、男性にエスコートされて歩いていたという記録もあります。

Q：アメリカが植民地と言われたのは、いつごろからでしょうか？

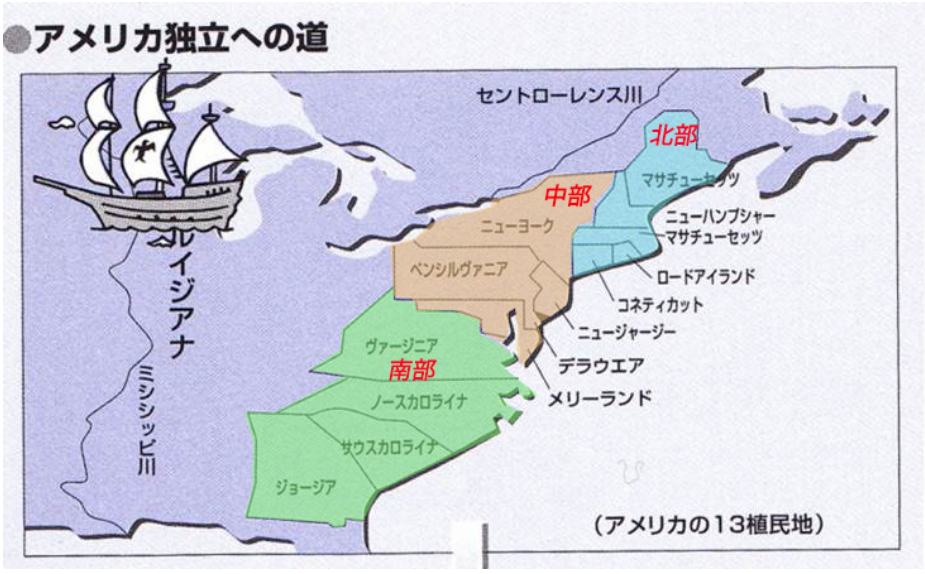
バスコ・ダ・ガマは、ポルトガル・スペインの大航海時代の 1497 年 7 月 7 日にポルトガルの首都リスボンを発ち、1498 年にカリカットに到着。それ以前に、コロンブスは、1492 年にカリブ海の島に到着しています。アメリカ大陸には、ヨーロッパからの植民者によって、以下のような植民地が建設されました。

北部植民地

メリーランド	1632
ニューハンプシャー	1629
コネティカット	1662
ロード・アイランド	1663
マサチューセッツ	1691

中部植民地

ニュー・ヨーク	1664
ペンシルヴェニア	1681
デラウェアー	1701
ニュー・ジャージー	1702



④ アメリカの 13 植民地

南部植民地

ヴァージニア	1607
ノース・カロライナ	1713
サウス・カロライナ	1713
ジョージア	1732

Q：アメリカでは、どのような服装になっていたのでしょうか？

北部・中部・南部で違いがありました。

一般に、服飾史や教科書では、ヴァージニア移住者の多くは 16 世紀のイギリスの贅沢なルネッサンス朝の服飾を維持し続けたと言われています。実際に南部では、プランテーション農業経営制度を導入し、アフリカからオランダ船で黒人を連れてきて奴隷化（1619 年）し、白人年季奉公人は 4 年で独立できたのに、黒人は終身奴隷のままの状態でした。そのため、プランテーション経営者は威厳を保つためにイギリス服をステータスシンボルとして着続けたと言われています。しかし、温暖なこの地方の気候では、長続きせず、不自由な衣服からゆるやかな衣服へ、また、全鎧を半鎧へ、またイギリスの王党派のバロック調の衣服へという変化がありました。女性も 1602 年には、二人（女主人と女中）だったのが、1619 年には、90 人の女性が送り込まれ、植民者の妻になったのです。

Q：では、北部ニューイングランドではどうだったのでしょうか？

ここでは、小農民的な土地所有制度を基礎とする民主的な自治植民地が形成されつつあり、それは大きく二つに分けられます。それは、第 1 の集団 1620 年メイフラワー号でプリマス植民地へ入植したピルグリムズと第 2 の集団は、1630 年に、マサチューセッツ湾植民地へ入植したピューリタン達です。第 1 の集団は、分離派ピューリタンで貧しい農民でした。彼らはジェームズ 1 世の弾圧によりイギリスを脱出し、オランダのアムステルダムに逃れ、1620 年に新天地を求め大西洋を越え、メイフラワー号で新大陸へ渡ってきたのでした。　第 2 の集団は、イギリスの中産階級（土地所有者・商人・学者・小作農）などが含ま

れます。彼らの衣服の中に南部の王党派の衣服と類似したものが出て来て、聖職者達は奢侈禁止令を制定したのですが、成功はしませんでした。中部のニューヨークの前身に植民したオランダは、ハドソン川両岸に半荘園的な制度に基づく農業植民地を開拓経営し、宗教的にも寛容で　ニュ―イングランドからの移住も促進しました。ここでは、毛皮貿易が繁栄し、毛皮が植民者の衣服に占める割合は大きかった。また、羊毛、リンネル、木綿の家内生産が推進され、これらは小農民や手工業者の日常的な衣料でした。

このように植民地の上流階級は基本的にヨーロッパの衣服を踏襲し、ヨーロッパからの輸入品やアメリカ製の衣服を身に付けることによってアメリカにおいてヨーロッパの生活の再現をはかろとしたといえます。また、「ピューリタン衣裳」という一般的なイメージは貧しくつましい経済生活を想起させるのですが、実際には階層によって多様性があり、質素で地味な服装をした信仰心の熱い人々と植民地経済の発展にともなって、贅沢な服装をするようになった人々がいたと言われています。やがて、北部では鉄工業、羊毛工業などの経済発展が見られ、これらの工業は、現代アメリカの資本主義発展の原動力となっていったのです。

⑤ピューリタン衣裳

参加者（敬称略）から、自己紹介と感想を述べていただきました。(11 名参加)

藤田宗次：Global Session 最多参加者。NPO 法人京都映画クラブ理事。亀岡市在住。
後藤安子：NPO 法人京都生涯教育研究所の紹介で姫路から(法学者）。
向井三貴：長岡京市から、インテリアコーディネーター・ラオス織物の紹介と指導・ラオスに学校設立。
谷　紀子：伏見区から。服飾研究者。アメリカ滞在中にヴァージニアの植民地跡地など訪問。
元井めぐみ：服飾研究者、ヨーロッパの服飾研究がおもしろい(大学教員）。
山泉恵子：左京区から。コネチカット州に滞在した。ピューリタン時代の街も訪問。
森口富子：伏見区から。息子さんの住むアメリカで、プリマスへ訪問体験あり。詰め物を男性もしていたとは驚きである。
岩倉由美：神戸市から。ビーズ作家・ルーブル美術館にも出品。ビーズの産地のミルウオーキーも訪問。3 月にはホノルルで展示予定。
大江利博：滋賀県高島市から。はこだてスキー場がある。英語も話したい。京都へ出かけて学習する。
児嶋きよみ：Office Com Junto 主宰。

注
① 濱田雅子著『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996 年）
② ある紳士の肖像、パリ(Musee du Louvre 所蔵、丹野、原田編著『カラースライド゛西洋服飾史』衣生活研究会、No.106、丹野郁提供）

③　エリザベス一世女王。作者不詳（London National portrait Gallery 所蔵)、丹野、原田編著『カラースライド`西洋服飾史』衣生活研究会、No.106、丹野郁提供。
④　13 植民地　宮崎正勝著『早わかり世界史』（日本実業出版社、2005)p.136.
⑤　ピューリタンの男子服と女子服（R.T. Wilcox, *Five Centuries of American Costume*, p119, reprinted with permission of Simon&Schuster, New York)(濱田雅子著『アメリカ植民地時代の服飾』1996, p.50）。

ウィリアム･ブラッドフォードの銅像。プリマス植民地の総督・歴史家。
ケープコッド岬にて。
撮影　濱田雅子　1987年。

ジョン・スミスの銅像。
ジェームズタウンにて。
撮影　濱田雅子　1999年。

17世紀の植民者に扮した女性。ジェームズタウンにて。1999年。

ジェームズタウンの植民者の住居（復元）
ジェームズタウンにて。1999 年。

（文責　児嶋きよみさんの原稿に、濱田雅子が写真を添付し、リライト）

濱田雅子の服飾講座
「服飾から見た生活文化」シリーズ　その３
2014年６月　Global Session（第　　回）

日時：2014 年 6 月 14 日（土）　1:30～3:00
場所：京都府国際センター　京都駅ビル９階
(JR 京都駅南北自由通路伊勢丹百貨店南エレベーター利用)
Tel & Fax 075-342-5000　　参加費：600 円

タイトル：南蛮服飾を通してみた東西文化の交流

講座のご案内

Ⅰ　丹野　郁著『南蛮服飾の研究　ー西洋衣服の日本衣服文化に与えた影響ー』（雄山閣、1976 年）との出逢い

濱田が恩師　丹野郁博士の学位論文である本書に出逢ったのは、1981 年 12 月に「丹野郁服飾研究所」にて、西洋服飾史セミナーに参加させていただきはじめて間もなくの頃である。本セミナーへの参加のいきさつは以下の通りである。

パートや下請けで携わっていた低賃金、深夜労働の洋装界の仕事を辞めて、研究を再開するきっかけを下さったのは、日本大学の和田典子先生である。当時、東京都品川区の下神明に住んでいた濱田は、たまたま区の広報で知った旗の台の公民館で行われた「働く婦人の講座」に参加した。講師は日本大学の和田典子先生で、洋装界の労働の過酷さについて打ち明けたところ、丹野郁先生のご連絡先（電話番号）を記されたメモを下さった。さっそくお電話を差し上げ、以来、1986 年 3 月まで池袋の「丹野郁服飾研究所」に通うことになる。そして、同年、4 月に武庫川女子大学大学院家政学研究科（修士課程）に入学した。指導教員は丹野先生である。

丹野先生は、濱田が研究所に通い始めて間もなく、「濱田さんはアメリカ史のバックグラウンドがおありなので、アメリカ服飾史を研究して、論文発表をされると良いですよ」という貴重なアドヴァイスを下さった。濱田は師のご助言をいただいて、すぐにアメリカ服飾史研究に着手した。そして、確か、1982 年 1 月のことである。資料収集のため、永田町の国会図書館に赴いた。アメリカ服飾史の研究書は皆無であった。だが、丹野先生の「『南蛮服飾の研究　ー西洋衣服の日本衣服文化に与えた影響ー』（雄山閣、1976 年）との出逢いは、

感無量であった。本書は絶版だと知り、図書館から、すぐに先生にお電話を差し上げ、本書の全ページコピーの許可をいただいた。帰宅後、一夜にして、無我夢中で読破。それから製本屋に出して、製本してもらった。今も書斎のブックマンに大切に保管している。幸いなことに、本書は 1993 年に雄山閣から再版された。高価な本であるが、再版と同時に購入した。

院生時代に、学外実習として大阪南蛮文化館を訪れた。また、第 8 回国際服飾学術会議とポルトガル・スペイン服飾研修旅行で、リスボンの「古美術館」の南蛮屏風を観る。その後、古美術館のメンデス・ピント館長ご夫妻が来日された時には、濱田が南蛮美術館をご案内させていただく。

2004 年と 2005 年の秋に、丹野先生の後任として、装道礼法きもの学院名古屋校で「西洋服飾史―東西文化交流の視点から―」というテーマで、講演を依頼された。その内容には「南蛮服飾」も含まれており、丹野先生は貴重なスライドのコピーを許可して下さった。

濱田は南蛮服飾研究の専門家ではないが、上記のように、丹野先生の元で南蛮服飾について、学ばせていただく機会にめぐまれ、大学の講義のシラバスにも取り入れてきた。

6 月の Global Session ではアメリカ服飾関係のテーマでの講演を考えていたが、共催の Office Com Junto の児嶋様から是非、南蛮服飾について話してもらいたいとのリクエストがあった。

そこで、本講演では僭越ながら、丹野郁博士のご研究を紹介させていただき、先生が残された研究課題についてもお話しさせていただきたいと思う。以下の概要は丹野先生が武庫川女子大学大学院家政学研究科の授業で配布された資料を、「ですます調」にし、本講演の流れに沿って、順序をアレンジさせていただいたものであることをお断りしておく。

Ⅱ　概要

１．南蛮人渡来とファッション革命

古来、わが国の服飾文化は、外来文化の影響を受けて発展してきました。古くは大陸、特に中国文化の影響を、そして戦国時代末期に突如として渡来した西欧文化の刺激を受けました。日本人が初めて西欧人に接したのは 16 世紀後半に来日した、いわゆる南蛮人（ポルトガル人）でした。彼らは、周知の通り、キリスト教の布教と貿易とを目的として、往復 2 年余を費やして定期的に、約 1 世紀にわたって日本へ渡来したました。南蛮人の渡来は、精神的にも物質的にも先進国のさまざまな文化をもたらし、日本の歴史に大きな飛躍を与えたという点で重要な出来事といえます。

ポルトガルが世界を制覇する勢いで海外飛翔を行っていた、いわゆる大航海時代は、日本にとっても西欧風俗に初めて出会った覚醒の時期でした。

天正遣欧使節を含む南蛮人一行が長崎に到着し、秀吉のため「ミヤコに到着すると、一行の通る街路という街路に悉く数限りない人が埋まって、きらびやかに飾り立て華やかな衣服を身に纏い、整然たる行列でミヤコに入って行く異様の見知らぬ人々を観て皆喫驚した。されば、一行の一人一人を天より降下した仏、即ち、パゴデ (pagode)のようだというた」と、

宣教師ルイス・フロイスは当時の状況を述べています。日本人が彼らの美麗豪壮な装いを見て、いかに驚嘆したかは想像に余りあります。それゆえにこそ、日本人が描いた南蛮屏風には異国人の服装が、驚くほど克明に周密濃厚な描写で表されているものと思われます。

南蛮風俗の流行が、天正遣欧使節の帰朝(1590 年)以後熱狂的になったことは、歴史家マードック（Dr. James Murdock）も指摘しているが、この現象は 16 世紀末期ごろから 17 世紀はじめにかけて、まさに南蛮ファッションとして権威をもちながら普及し、異国憧憬の気運をかき立てながら、日本人の生活観さえ変えてゆくのでした。

南蛮ファッションは何よりも衣服に顕著でした。呼称、形、材料、装飾、さらに着方に至るまで競って異国調を取り入れました。じゅばん、カルサン、カッパ、メリヤス、ビロード、ボタンその他今日まで残るポルトガル語由来の名称は少なくありません。これらは日本人がものめずらしげに着ているうちに定着したもので、南蛮人は、実に、ファッション革命を日本にもたらしたともいえます。

したがって、南蛮的要素は鎖国に入ってからも根強く潜在し続け、今日に命脈を保っているのです。というのも、南蛮服飾は外観の奇抜豪華さに加えて、機能性もありましたので、一般庶民の生活まで広くゆきわたったものと考えられます。

２．南蛮服飾とは

南蛮服飾には次の 2 つがあげられます。

(1)　南蛮貿易時代に外国人が身に着けていた服飾品、または外国から将来されたと思われる服飾品のこと。

(2)　外来服飾の影響を受けて変容した日本服、すなわち、何らかのかたちで西欧的または南蛮的要素を含む日本服のこと。

３．南蛮人の服装

南蛮人の主要な衣服は、上衣（ジバン）、脚衣（カルサン）、靴下（メイヤス）、外衣（カパ）です。

４．ポルトガル語由来の日本語

ジバン→じゅばん（襦袢）
カパ→カッパ（合羽）
ヴェルード→ビロード（天鵞絨）
ラシャ→ラシャ（羅紗）
カルサン→カルサン（軽衫）
メイヤス→メリヤス（目利安、莫大小）
ボタン→ボタン（釦）

５．遺品に見る南蛮服の特徴

A. 上衣

(1)　伝加藤清正着用　熊本市本妙寺所蔵上衣

(2)　伝細川忠興着用　熊本市島田家所蔵鎧下
(3)　伝細川家宣着用　静岡市久能山東照宮所蔵鎧下
(4)　伝細川頼宣着用　和歌山市紀州東照宮所蔵の襞衿・鎧下

B. 脚衣
(1) 伝徳川家康・頼宣着用　和歌山市紀州東照宮所蔵カルソン
(2) 伝織田信長着用　近江・風土記の丘資料館所蔵革袴
(3) 伝上杉謙信着用　米沢市上杉神社所蔵革袴
(4) 伝三澤初子着用　仙台市博物館所蔵カルソン
(伊達正宗の愛妾)

C. カパ（套衣）
(1) ビロード製套衣　牡丹唐草紋様　米沢市上杉神社所蔵
(2) 濃緑羅紗マント　仙台市博物館所蔵

６．日本衣服への影響

(1)　日本人の服装観の変革（肌着、外出着の着用、機能性の導入）
(2)　呼称（じゅばん、カルサン、カッパ、メリヤス、ビロード、ボタン、ラシャ等）
(3)　斬新なデザイン（曲線裁ち、金モールやフリルなどの装飾手芸）
(4)　新奇な材料、染料の導入（西欧または南方諸国より）
(5)　ボタンとボタンホールの出現

7．今後の研究課題：ポルトガル人の立派な服装はどこで整えられたか。

参考文献

・丹野　郁著『南蛮服飾の研究』(雄山閣、1976 年, 1993 年)
・『週刊　日本の美をめぐる　No.30　桃山１　織田信長と南蛮屏風』(小学館、2002 年 11 月)
・岡　美穂子著『商人と宣教師　南蛮貿易の世界』(東京大学出版会、2010 年 11 月)

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

参加者（敬称略）：濱田雅子、真田千奈美（乾物屋を営みながら、50 才で大学院に学び、現在乾物の普及を仕事としている。また、実家の家業が縫製業でこの GS に興味を持った。京都生涯教育研究所の会員）、亀田博（ツアーガイドでポルトガルやスペインも案内、大津市在住）、楠見静子（元教員、日本語教師、大阪モード学院でも学ぶ。京田辺市在住）、元井めぐみ（大学教員、日本服飾史も担当、長岡京市在住）、平山（大阪のプロダクションマネージャー、京都生涯教育研究所の会員）、冨士谷あつ子（NPO 法人京都生涯教育研究所副理事長）、児嶋の 8 名。

南蛮屏風
国立古美術館所蔵
撮影　濱田雅子

ベレムの塔
撮影　濱田雅子

濱田雅子先生の、自己紹介です。
「神戸大学を卒業後、夫君と共に転勤場所に移動しながら、洋装の仕事に関わっていて、丹野郁先生と知り合い、「丹野郁服飾研究所」に通い始めました。1981 年から 1986 年 3 月まで研究所に通いながら、アメリカ服飾史研究を続け、1986 年 4 月に武庫川女子大大学院家政学研究科(大学院）に入学されたのは 43 才でした。このようなことから、生涯学習には、大きな転機となる何かチャンスが必要であろうと思います。」

NHK の現在の大河ドラマ「黒田管兵衛」でも、織田信長が出演していますが、彼のファッションに注目してみて下さい。ちょっと他とちがいますね。南蛮貿易時代とは、1543 年から、1641 年の約 100 年間を指しますが、流れは以下のようになります。

1543 年　ポルトガル船が種子島に漂着
1549 年　フランシスコ・ザビエル　来日　キリスト教(イエズス会）を布教し始める
1551 年　平戸にポルトガル船来港
1581 年　バリニャーノ織田信長に謁見

1582 年　　天正遣欧使節団　　長崎を出航 2 月 20 日
（4 少年以外、日本人随行員・宣教師等 300 人）
マカオ、マラッカ海溝、リスボン
6 月 21 日　　織田信長　　本能寺の変
インドのゴア（ポルトガル領）へ。バリニャーノはこの地に留まる。
アフリカの喜望峰を回り、大西洋を北上
8 月 11 日　　ポルトガルのリスボンへ
11 月 14 日　　スペイン　マドリードへ
1586年 4 月 22日　　イタリアローマへ
1587 年 4 月 13 日　　リスボンを出発
1587 年 5 月 29 日　　インドのゴアへ　バリニャーノと再会
1587 年 7 月　秀吉バテレン追放令
1590 年 7 月　バリニャーノの案で各地で送られた品々を
秀吉に献上し、帰国
1598 年　　秀吉死去
1600 年　　徳川家康　　江戸に幕府を開く
1614 年　　徳川幕府　最初の禁教令
1624 年　　スペイン船来航禁止
1635 年　　日本人の海外渡航と在外日本人の帰国禁止令（国内向けの鎖国体制）
1636 年　　長崎の出島にポルトガル人を押し込め、中国船との貿易も制限
1637 年　　島原の乱　　出島のポルトガル人を追放し、対外貿易はオランダと中国に制限
1641 年　　平戸から出島にオランダ商館が移転

発見の記念碑
撮影　濱田雅子

「大航海時代を著したマルコ・ポーロの『東方見聞録』には、日本は黄金の島と書かれているそうですが、彼は日本に来たのでしょうか？」という問いかけが濱田先生からありました。南蛮船はポルトガルのリスボンを出発し、アフリカの喜望峰をめぐり、インドのゴアやマカオを経由して長崎に来ています。リスボンのテージョ川という大きな川の河口には、大航海時代を見守ってきたベレンの塔があります。

天正遣欧使節の肖像画 "Newe Zeyttung auss der Insel Japonien"（1586年）。
右上・伊東マンショ、右下・千々石ミゲル、左上・中浦ジュリアン、左下・原マルチノ。中央は案内兼通訳のメスキータ神父
http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhi

また、リスボンの国際古美術館には、日本から贈られた南蛮屏風が展示され、これを観る観客で常に賑わっています（濱田先生も児嶋も実際に見て来ました）。このような屏風絵は、大阪中津の「南蛮文化館」でも5月と11月の2ヶ月だけ、公開展示されています。これらの屏風絵は、後に絵師によって描かれたものも多くあり、初期の作とのちがいも見られますが、どのようなファッションであったかが目の前で観察できます。

濱田先生のレクチャーから、

「ポルトガル船から荷物を降ろし、従僕と見られる人や黒い皮膚の色の人も沢山、降りています。絵の上方の雲の上には天主堂が画いてあります。それぞれの地位を表す衣服を着ていると言えます。行列の先頭には、カピタンモール(商館長）がいて、孔雀、アラビア馬、猪、犬などの動物も居ます。外国人の服装は、襞襟、上衣（ジュバン）、マント（カッパ）、裾をしぼった短めのズボン（カルサン）、靴下（メリヤス）など、今も日本語として残っているポルトガル語のファッションが見られます。

右側の屏風には、出迎えに出てきたイエズス会の宣教師の黒の長衣（カッパ）、帽子も見られます。フランシスコ会派の宣教師は茶の長衣で、腰紐などを身に着けています。

東西文化の交流という課題に即して言えば、西洋の衣服が日本やアメリカに持ち込まれているわけです。では、西洋の衣服とはどのようなものを指すのかという問題が持ち上がってきます。ポルトガルのジョアン１世の上衣とフランスのプールポアン（口絵２）は、鎧下に着る服で、前開きでボタンがたくさんあります。現在のダウンジャケットのように中に麻くずが詰め込まれ、刺し子のように縫い留めてあります。スリムな形で紋章が織り込まれた布が用いられています。動物界の王者であるライオンや鷲の紋章が織り込まれています。

17 世紀初期の男性の衣服は、ルネッサンス期には金モールなどの装飾が施されています。でもベルトがなかったので、上衣に下のズボンをつり下げる形になっていて、トイレに行きにくいために、今のおむつのように藁くずを入れていたと言われています。

日本の武将も南蛮船から衣裳をもらうのを喜んでいたという記録もあります。例えば、加藤清正（1562 年 7 月 25 日生～1611 年 8 月 2 日亡）の単衣の上衣が熊本の本妙寺というお寺に残存しています。南蛮屏風絵にあるとおりの形状であり、平織りの麻製で、襟にはほつれ止めの布もはめ込まれ、襟の裏 にもバイヤス布が当てられ、首を保護しています。袖口は洋服らしく細くなっています。

ここで、加藤清正の上衣はポルトガルで作られたのか？あるいは、インドのゴアあたりで作られ、日本に持ち込まれたものなのか？といった疑問が湧いてきます。この問題は、まだ明らかになってはいません。リンス・ホーデンの「東方案内記」には、ゴアには下着や装飾品の店があったという記録が見られます。

女性の衣服はどうでしょうか？エリザベス１世の上衣が残存しているのですが、シュミーズ、コルセットの種類があり、上衣の袖は別仕立で、身頃に紐で止め付けてあり、上着には詰め物もしてあります。

日本の服に取り込まれている例としては、細川忠興の鎧下があります。この衣服の背部には家紋があしらわれ、襟幅は 8.3cm もあるそうです。また、金モールの装飾が施され、袖は今のシャツと同じようにカフスがあるのですが、ボタン付けの穴とボタンが今と反対

になっています。このように見てくると、身頃は和服仕立てで、袖は曲線で、襟は高く、背中には紋がついています。

（是非、テレビの信長の衣裳に注目してみて下さい。何かの発見があるかもしれません）。

また、脚衣に目を向けると、袴のような形で裾がすぼまっているものもあります。織田信長は、鹿皮のカルソンを穿いていました。これにはボタンホールもあり、南蛮文化をいち早く理解し、興味を持った人と言えるようです。滋賀の安土城は、天守閣が八角形で、信長は、地球儀を眺めていたと言われています。地球が丸いと 1582 年に亡くなるまでに理解していたと言えます。上杉謙信もカルサン風の皮袴に、くるみボタンとボタンホールがあるものを着用していたようです。

食べ物に関するポルトガル語もたくさん残っています。　例として、ボーロ（お菓子）、ビスケット(biscoito）、こんぺいとう(confeito）、パン(pao）などかなりあります。どのように入って来て、なぜ、残ったのかは今後の研究課題です。

洋服が入ってきたことにより、斬新な衣服のデザインや、縫製技術、染料、ボタンやボタンホールなどの影響を大きく受けたと言えます。

今後の課題として（濱田先生の案）

１．東アジアのゴアや、マカオ、中国の各都市などの影響についてもアプローチが必要である。

２．南蛮屏風絵を見るとカピタンなどの商館長のように地位の高い人とともに、多くの使用人が画かれていて、身分差が見られる。靴、マント、上衣などに加え、裸足の黒人や白人の使用人も見られる。中には、日本人の奴隷の記録もあると聞いている。アメリカに奴隷が送られる前に、アジアに連れて来られたアフリカの奴隷や、アジアから、南米などに連れていかれた奴隷扱いのアジア人の存在も無視できない。奴隷の出自と服装の解明が今後の研究課題である（口絵３）。

先日、テレビを見ていたら、「どうして現在のアフリカは常に争いが絶えないのか、同じ民族と言えるような、ちょっとのちがいなのに」という問いかけがあり、その答えのひとつとして、「かつて 15 世紀から大航海時代に、アフリカをはじめ、アジアに乗り込んで行ったヨーロッパ諸国が、徐々に植民地から手を引いていった時、その地域の状況などを無視して、自分達ヨーロッパの考えだけで国の境に線を引いてしまったことが大きな争乱の糸口であろう」という意見がありました。

植民地化するときも、やめるときも、自分中心の考えで幕を引けばいいと考える浅はかさに心が痛みます。多分、日本もかつてそのようにして幕引きをした地域があるのではないでしょうか。現在の日本人に責任は無いのかもしれませんが、せめて、この国で共生していこうと考えることが、これからの、この国に住むひとびと全員に課せられている課題ではないかと思います。

（文責　児嶋きよみ　校閲　濱田雅子）

屏風に描かれている服装は、暑い時期のものであり、長旅のあとの姿である。それにも拘わらず、どの人物も整った恰好でとくに紳士たちの装いは、西洋服飾史上最も奇抜、かつ豪著さを以て知られるルネサンス期の典型的なスタイルである。一見異様とさえ感じられる巨大な衣裳様式は、そもそも西欧では、上流人の趣向によって、権力や巨富を示すために作られたものである。この画でも、カピタン・モールをはじめ、ポルトガルの紳士は、この種の衣服を最も良く着こなし、威風堂々と振る舞った様子が窺える。

カピタン・モールは海上でポルトガル船とポルトガル人の支配者であったのみならず、日本滞在中は在留ポルトガル人に対して支配権を持っていたから、その権勢ある身分にふさわしく高級で迫力ある服装をまとう必要があった。画面の上陸集団の先頭に立つカピタン・モールは、イスパニア風の標準的正装をしている。即ち、上衣に襞衿、ズボン、靴下、それに帽子、短いマントという組み合わせである。こうした正装のポルトガル紳士の姿は南蛮屏風に共通な中心画像で、描写された服装も定型化している。

南蛮屏風　右半隻　大阪・南蛮文化館蔵
岡本良知、高見沢忠雄共著『南蛮屏風』（鹿島出版会、1970年版）

丹野　郁著『南蛮服飾の研究』（雄山閣、1976年）p. 37.

濱田雅子の服飾講座
「服飾から見た生活文化」シリーズ　その４
2014 年 10 月　Global Session（第　　回）

日時：2014 年 10 月 11 日（日）　10:30～12:00

場所：ガレリアかめおか　3 階第 4 会議室　参加費：600 円

〒621-0806 京都府亀岡市余部町宝久保１－１ Tel 0771-29-2700

タイトル：　**服飾を通して見たアメリカ人意識の形成**
―アメリカ独立革命期を舞台として―

講座のご案内

１　独立革命と衣文化―アメリカらしさの萌芽

北アメリカ植民地の社会は、150 年にわたってヨーロッパから継承してきた諸制度や生活慣習を変容させ、新しい社会の基礎を作り出した。衣文化についてもヨーロッパの文化がそのまま移入された初期の状態から、植民地北アメリカの気候・風土に適応しながら、また北部・中部・南部というそれぞれの地域の異なる社会・経済構造に見合った形で変容した。

北アメリカ東部のイギリス植民地は 7 年戦争後の課税問題をめぐって本国と対立し、1773 年のボストン茶会事件を契機に対立は一層深まり、レキシントン・コンコードの戦いで独立戦争の火ぶたが切って落とされた。この戦争は 1789 年のアメリカ合衆国憲法にもとづく政府の成立によって終結をみる。そして独立前後から、政治・経済面の動向とあいまって、衣生活の面でもアメリカらしさの萌芽が見え始める。本講演では、この独立革命期にどのようにしてアメリカらしい服飾が誕生してきたのかを見てみようと思う。

簡素化する衣服　ヨーロッパでは 17 世紀末期から 18 世紀中葉まで、ロココの文化様式が英仏を中心に栄えていた。ロココ様式は 18 世紀のアメリカの上流階級の服飾にもとり入れられ、細胴と拡大されたスカートを特徴とする装飾華美な衣装がもてはやされたのである。これはメトロポリタン美術館などに収蔵されている衣服の遺品からも明らかであろう。しかし、フランス革命やアメリカ独立革命のような歴史的事件の前後から、すでにファッシ

ョン観における変化は進んでいた。ヨーロッパ、とくに 18 世紀後半のイギリスでは資本主義の発達と自由思想の普及に伴い、服飾の様式も簡素化し、宮廷人さえも旧貴族の誇大な服装を追い求めることなく、派手やかさを捨て、落ちついた形式の服装を好むようになった。アメリカの場合も、このヨーロッパの傾向と同じく、ファッションは簡素化の方向へと変化した。こうした変化はトーマス・ジェファーソンをはじめ、多くの人々によって鼓舞された啓蒙思想や自然主義思想の影響も少なからずあると思われる。

では具体的に服飾はどのように簡素化されたのであろうか。スミソニアン協会の資料によると、初代合衆国大統領ジョージ・ワシントンは、1789 年の就任式に際し、地味な茶色の服地のスーツを着用していた。それは上流人らしい実直な装いで、エレガントではあるが、贅沢さや派手さを抑えたものだった。そして、このワシントンの装いには、「スーツは合衆国で生産された素材で作られるべきである」という彼の主張がこめられていたというのである。ワシントンのこうした姿勢は、その後のアメリカ服飾史を見ていく上でまことに示唆に富む。

一方、同じ時期の女性の衣装については、1750 年から 1790 年にかけて、ゆったり襞づけされた幅広い布地に見られる大胆な色や柄から、体にぴったりするように裁断された布地でパステル・カラーと繊細な柄へと変化した。このことはブルックリン博物館や、ニューヨーク・ファッション工科大学などに収蔵されている 18 世紀末から 19 世紀にかけての女性衣装の遺品でも同様のことが見出せる。

２　上流人のファッション観―服飾のマナー―

1776 年 7 月 4 日、アメリカの植民地(13 州)は大英帝国から独立を宣言した。スミソニアン協会の国立アメリカ史博物館では、1985 年 11 月より独立 200 年を記念して「独立の後：アメリカの日常生活 1780～1800」と題する企画展が行われた。1987 年夏、筆者は同館を訪れ、直接この展示を観る機会を得た。同館発行の小冊子によると、「この展示は独立直後 20 年間の普通のアメリカ人の日常生活にみられた多様性と葛藤とを検証するものである」という。

展示会場には「コスチューム・スタディー・ギャラリー」という服飾専門のコーナーが設けられ、1775 年頃の晩餐会で着用されたと思われる何種類かの上流階級の男女の衣装が展示されていた。ここでは、このスミソニアン協会の収蔵品と研究資料に依拠しながら、上述の男女の衣装について、その特色をみてみたいと思う（口絵 5，6）。

３　ショートガウン－庶民の衣文化－

庶民服の研究動向　　アメリカ史上の庶民服に関する研究は、アメリカの研究機関や研究者によって、近年、徐々に進められているが、その代表的な研究機関の一つとして注目さ

れているのが、前項でもとり上げたスミソニアン協会であろう。同協会では庶民服史の研究が 1971 年から開始され、その研究成果が精力的に発表されている。

注目すべき研究は、スミソニアン協会学芸員のクラウディア・キドウェル（Claudia Kidwell）の論文であり、庶民服研究の進展の背景が詳述されている。その内容のあらましは次のようである。

＊＊＊＊

現存する肖像画と衣服は、かつて植民者たちがどのような衣服を着ていたのかについて、明確な証拠をわれわれに示してくれる。だが肖像画に関していえば、それを委託できるだけの余裕のあるアメリカ人像のみを表わしており、しかもそのモデルのほとんどが盛装をしていることに注意しなければならない。これは実生活において実際に着用されていたものが何であったのかについて調べるのには役に立たない。現存する衣服の事例についても同じことがいえる。すなわち、その多くが富裕な人々の衣服を代表するものであることは否定できない。その結果として、アメリカ人の大多数が着用していた簡素な衣服よりも、立派な衣服の方が今日のわれわれにはよく知られていることになる。また、衣服を一種の装飾美としてしか捉えていない博物館が、エレガントな衣服のみに焦点をおいて展示を繰り返すことが、それに拍車をかけている。これは歴史の研究を趣旨としている博物館としては相応しくない行為であろう。

このようなわけで、1970 年頃までは、18、19 世紀の質素な衣服に対して、正当な評価がなく、そのために、庶民服飾に関する資料収集、丁寧な保存、目を引く展示や出版などの活動が積極的に行われなかったのであろう。それにもかかわらず、初期のアメリカにおいて何が着用されていたのかを知りたいという声が高まると、これを機会にスミソニアン協会は遅まきながら 1971 年、正式に 18、19 世紀のアメリカ庶民の衣服に関する研究を開始したのである。

＊＊＊＊

以上のような研究状況の中で庶民服史の研究に先鞭をつけたキドウェルは、18、19 世紀アメリカにおける庶民服の典型的な事例として「ショートガウン」を取り上げ、スミソニアン協会の協力のもと、33 種のガウンをアメリカ全土から収集し、そのうちの 28 種について、詳細にわたる実証的研究を進め、その成果を論文「ショートガウン」(1978)に著した。

本講座ではキドウェルの論文に掲載されたパターンを用いて、武庫川女子大学の濱田のゼミの学生たちが再生したショートガウンを紹介し、庶民服の特徴を見てみたいと思う。

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

参加者（敬称略）
濱田雅子、塚本勝之、石本智子、西野千保子、亀田博、平山あした、並河あや子、谷紀子、児嶋　以上９名

自己紹介

塚本：ドイツ語を学習中で、アメリカにも行き、今日のタイトルに興味がある。（息子さんは、バークリー音楽学校を卒業後、アメリカでミュージシャンになり、時々、京都などでもコンサートを開催・児嶋とは、30 年以上前からの子ども同士が保育園在学中からの知り合い）。

石本：アメリカ留学経験あり・京都市で外国につながる子どもの学習支援をしていて、児嶋とともに研究会のメンバー）。

西野：アーティストで子どもの絵の会を主宰・夫さんは、ワールドトレードセンター跡地のアートを作成されたアーティスト。

亀田：世界各地に旅をアレンジするガイドや、日本に来るグループのマナージメントを仕事にしている。今年はベトナムや台湾なども。

平山：シニアのタレントをしている。

並河：ひまわり教室の日本語指導者メンバー。

谷：服飾研究者で濱田さんの友人。アメリカのブルーマーなどのリフォームドレスについて研究中。

講座は、濱田雅子先生の自己紹介から始まりました。

濱田：2013 年から続く「服飾から見た生活文化シリーズ」の 4 回目である。武庫川女子大で 17 年教員をし、アメリカ服飾社会史研究会設立後、5 年目になる。研究の方法としては、原書を翻訳しながら、読むことと、フィールドワークの二本立てを取っている。

現代、アメリカ服飾がカジュアルであると思うのは、普通であるが、その動きは、第二次大戦以後であり、その前は、長くヨーロッパ志向だった。

1620 年にメイフラワー号で北アメリカにやってきた人々はヨーロッパ本国の植民地をどんどん作って行き、1789 年に独立戦争の終結を見る。その前後から衣生活の上でもアメリカらしさの萌芽が見えはじめる。

17 世紀末期から 18 世紀の 60 年代ごろまでは、ヨーロッパではロココ様式という市民の

サロン文化が一世を風靡し、この風潮はアメリカの上流階級の服飾にも取り入れられていた。

（英語版のビデオで、アメリカ上流階級の妻と夫と子どもや使用人の生活を見ました。タイトル：Colonial Clothing: The Dress of Eighteenth Century America）

起きた女性は、上半身に着ていたシフトと呼ばれるいわゆるネグリジェを脱がず、その上から女性の使用人の手を借りながら、ひとつひとつ身に着けて行きます。まず、靴下をはき、左右のない靴を履き、紐付きのポケットの小物を腰に付け、その後に紐締め形式のステイ（コルセット）とフープというスカートを膨らませる装置を身に着けるのですが、紐で締め付けるために、一人では着用できず、使用人に紐を締めてもらって、ようやく身に着けるのです。そして、スカートをはき、次に髪を結い始めるのですが、これもひとりではできません。

ここに二人の子ども（姉と弟）が入ってきますが、小さな子どもである弟は、自分で洋服を着れたと母親に嬉しそうに告げて、年の離れた姉と鶏のエサをやるために部屋から出て行きます。子どもは大人の衣服のミニチュア版を着ています。

夫はそのころ、ようやく起きだし、今度は、バンヤンと呼ばれる綿入れの着物スタイルの部屋着を着て、男性の使用人に髭をそってもらってから、バンヤンを脱ぎ、この使用人の手を借り、服を身に着けて行きます。長い靴下や短いキュロットもはき、ベストとコートを着て、最後に鬘をかぶります。

ここで、使用人というのは黒人奴隷であり、黒人女性の使用人は、ショートガウンとペティコートとエプロンを着けています。この頃、奴隷制はどのようであったのでしょうか？

濱田雅子先生の著作『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）を著者割引きで購入した人もいますが、図書館にもあるはずです。詳しく調べたい方はどうぞ。また、先月の GS のお知らせを再度チェックされることをお奨めします。

今回のレポートでは、講義後のディスカッションを中心にお知らせします。

KT：先生は、映画を見ていても服飾の方に関心が行きますか？
濱田：ポルトガルのリスボンで開催されたICOM（International Council of Museum　ユネスコの下部機関）の服飾協議会で「アメリカ独立革命期の黒人奴隷の服装」(正式には Clothes for Slaves in Virginia in Revolutionary America, ICOM Costume Meeting at

Lisbon Portugal, 2000)いう発表をしたとき、「この内容をハリウッドに持って行った方がいいのではないか？アレックス・ヘイリー作の『ルーツ』(映画化）のなかの服装の実証のために」と言われました。研究に基づいた服飾を映画でも取り入れる必要があるという意味です。映画を服飾の観点から見ることも必要だと思っています。

KK：絵画でもその観点が必要ですね。以前、大阪の中津にある南蛮文化館で見た絵画には天正少年遣欧使節が描かれていて、そこに描かれている少年達が、まだ、なかったはずのフラットカラーのある洋服を身に着けていたことについて濱田先生と話をしたことがありますね。

濱田：おそらく衣服の知識のない画家が、ブラウスの衿はこんな風だろうと現代の衣服の衿を描いたのでしょうね。画家には服飾の知識が必要ですね。画家のなかには服のことを知りたくて、洋裁を始める人もおられますよ。

CN：ビデオの中でコルセットで締め上げていましたが、服装で強制するのですね。

濱田：コルセットで締め上げるので、肋骨を切りとったりという話も残っています。体形も時代によってずいぶん移り変わりがあります。時代により美意識のちがいもあります。中国などでも纏足で足を大きくしないのが美と思われていた時代があるように。

TI：服飾というのも奥が深いと思いました。アメリカに留学していたころは、カジュアルな服装ばかりで、このようなヨーロッパ志向の服装の歴史があったなんて全く知りませんでした。きれいになりたいという気持ちは常にあるのだと思い、また、髪型を作り上げる煩わしさが驚きでした。

濱田：南北戦争後、ヨーロッパ文化を取り入れる志向が変化を見せて来ましたね。つまり衣服材料の不足する戦時下で、いかにヨーロッパ風に装うか、アメリカ人はとても苦労しています。レースや刺繍装飾の代わりに、白い木綿の衿にカメオのブローチをつけるなど、創意・工夫し、「アメリカン・フレンチ・ファッション」に身を装ったのです。また、ヨーロッパからの移民が来る前から、アメリカ大陸には、先住民が住んでいて、そのルーツはやアジアと言われていますね。また、アフリカン・アメリカンも入って来ているので、多民族国家としてのアメリカの文化は、ヨーロッパには見られない文化だと思います。このような先住アメリカ人やアフリカン・アメリカンの服飾文化に関するお話も、おいおいこの Global Session でさせていただきたいと思っています。

AN：ショートガウンを使用人も中流階級の人も着ていましたが、素材は同じですか？

濱田：上流階級は上等のリネンを使うなどちがいがあります。ショートガウンはアメリカのスミソニアン協会の服飾研究者であるクローディア・キドウェルさん（庶民服研究の第一人者）が、全米から実物を 33 着収集され、分析結果を論文にまとめられています。これらの衣服は、この論文に掲載されたショートガウンの型紙から、シーチングという仮縫い用の布地を用いて武庫川女子大の濱田のゼミの学生たちが再生した庶民が着用していたショートガウンです。実際のショートガウンに用いられた布地には、リネンやコットンや羊毛や絹がありました。絹はごくわずかですが。庶民は布を節約し、コルセッ

トを着けないで、妊娠中も授乳時にも体型を問わずに、長く着れる実用的な衣服を考案したのですね（ショートガウンの型紙やシーチングでショートガウンを再生した実物も紹介）。

HK：フロックコートの刺繍などすばらしいですね。簡単なのはできなかったのでしょうか？ヨーロッパ風のマントもありましたね。

濱田：服飾史上、これほど素晴らしい男性の衣裳はありませんね。現代の男性にもこのようなおしゃれをしていただきたいものです。六甲アイランドの「神戸ファッション美術館」に実物がありますので、ぜひ、観にいらっしゃることをお奨めします。

写真１

写真２

写真１は「独立の後：アメリカの日常生活 1780～1800」と題する企画展の男女のマネキン。スミソニアン協会国立アメリカ史博物館にて 1985 年 11 月より独立 200 年を記念して開催。

写真２はベス・ギルガン（Beth Gilgun）の著作『18 世紀からの便り』に掲載された 18 世紀のショートガウン、ペティコート、シフトおよびエプロンの復元衣装を着用したアメリカ女性。

濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）第 3 章より

（文責　児嶋きよみ　校閲　濱田雅子）

濱田雅子の服飾講座

「服飾から見た生活文化」シリーズ　その５

日時：2015 年 2 月 28 日（日）　1：30～4：00
場所：ガレリアかめおか　３階第４会議室　参加費：６００円
〒621-0806 京都府亀岡市余部町宝久保１－１ Tel 0771-29-2700

タイトル：アメリカ史にみる職業着 ―植民地時代～独立革命期―

講座のご案内

本報告ではアメリカの植民地時代から独立革命期の 100 年間にわたる職業着について語らせていただく。資料は P.F.コープランド著、濱田雅子訳『アメリカ史に見る職業着―植民地時代～独立革命期―』(せせらぎ出版、1998 年) Peter F. Copeland, *Working Dress in Colonial and Revolutionary America* (Greenwood Press, Westport, Conn. 1977.である。コープランド氏の専門研究分野は、アメリカ独立革命やカリブ海の海底研究や 18～20 世紀の軍服や市民服に関する分野であり、元はアメリカ合衆国ワシントン D.C.のスミソニアン協会の歴史関係の主任イラストレーターをつとめておられた。そして、退職後はアメリカ史に関するフリーのイラストレーター、ライター、コンサルタ ントとして活躍され、論文や専門書の他、子ども向けの絵本 30 数冊を精力的に出版しておられたが、2007 年 12 月 8 日に逝去された。コープランド氏の著作のなかでも一番の労作である本書には、彼自身が描いた 200 点を上回る挿絵と 36 枚の写真が収録されており、1710 年から 1810 年までの 100 年間にわたって、欧米で労働に携わっていた人々が着用していたと推察される職業着が、歴史的背景や彼らの生活状態とともにビジュアルに描かれている。中産階級や下層階級の人々が、上流階級の華やかで、きらびやかな衣裳とは趣きを異にする、仕事の場面に特有な服装で労働に携わっている様相が、豊富な絵画資料によって再現されている。本書に登場する人物（合計 424 名）――船乗り、漁師、農民、商人、呼び売り、フロンティア開拓 者、御者、正規兵や民兵、医者、法律家、聖職者、使用人、年季契約奉公人、 奴隷、犯罪人、民族諸集団など――一人ひとりの仕事に取り組んでいる姿やしぐさや表情や、職種によって異なるさまざまな服装は、18 世紀の欧米の中産階級や下層階級の生活の様相を彷彿とさせてくれる。

目　　次

序章
第１章　船乗りと漁師
第２章　農民と農村労働者
第３章　職人と都市労働者
第４章　商人と行商人
第５章　フロンティア開拓者
第６章　輸送労働者
第７章　公僕
第８章　正規軍と民兵
第９章　知的職業人
第 10 章 使用人
第 11 章 年季契約奉公人と奴隷
第 12 章 犯罪人
第 13 章 民族に固有の服装
用語解説・参考文献・訳者あとがき・事項索引・人名索引

コープランド氏が収集した資料は、労働する姿を描いたヨーロッパのグラフィック・アートやアメリカの版画や逃亡奴隷を捕えるための広告や旅行者の明細書や糧食の注文書といったような原資料である。挿絵に対するコープ ランド氏の解説には、それぞれの衣服の説明、挿絵や版画の出典が示されて いる。彼は衣服や織物について、大変詳しく説明を加えており、スカート丈 やズボン丈、帽子の形、半ズボンよりも長ズボンが好まれたこと、また、ジャケットの裁断といったようなさまざまな変化に着目している。また、本文に続く包括的な用語解説では、18 世紀の生活についての詳細を記述するために 歴史家が必要とするであろう言葉が要約されている。 以上に述べてきたように、コープランド氏の著作はアメリカ服装史研究の価値ある魅力的な業績であるが、今後、この研究は 18 世紀の文化史に関する研究および 18 世紀の中産・下層階級の衣服の実物に関する研究と統合される ことによって、さらなる発展が期待されるものと確信する。本書は服装史研究者の方々と歴史研究者の方々に、ぜひお読みいただきたい労作である。

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

資料：①『アメリカ史に見る職業着―植民地時代～独立革命期―』P. F. コープランド著、濱田雅子訳（せせらぎ出版、1998 年）から

②上記翻訳書は、日本風俗史学会第６回《日本風俗史学会研究奨励賞》受賞。選考委員評(丹野　郁)（平成 11 年 10 月 9 日）

③同書は　日本図書館協会選定図書

④同書に関する出版情報(読売新聞書評　1998 年 11 月 15 日)「職業着をイラストで」

その他の参考文献(ヨーロッパとアメリカの公衆衛生の比較)

①メルシエ著、原　宏編訳『18 世紀パリ生活誌』（上下）岩波文庫、1989 年.

②北山晴一著『19 世紀パリの原風景ーおしゃれと権力』三省堂、1985 年.

③大森弘喜著『フランス公衆衛生史ー19 世紀パリの疫病と住環境ー』学術出版会、2014 年 5 月.

参加者（敬称略）：近藤正、向井三貴、澤恵子、船越茂、村上洋子、亀田博、田尻悦也、大田垣妙子、西村美保、西本好江、谷紀子、濱田先生、児嶋（藤原翠子さん・中国人留学生２人途中入室）（16 名）

自己紹介です。(今回は日本語で)

近藤 正：GS に来て脳みその活性化を図っています。みなさんと英語や日本語でテキストに基づいて話ができるのがいいです。

向井三貴：長岡京市から来ています。濱田先生の服飾講座は、２回目の参加です。前は、京都府国際センターでお聞きしたと思います。

澤　恵子：このような GS には、はじめてですが、以前に NPO 講座に参加して紹介してもらい、来ました。

船越　茂：いつもは英語ですが、今日は日本語だろうと思って気軽に来ました。植民地時代と聞くと、難しいテーマかなとも思いましたが。

村上洋子：テーマの「職業着」に興味があって来ました。(京都市芸大社会人学生)

亀田　博：濱田講座への参加は、今回で 4 回目です。ツアーガイドなのでいろいろな国に行っていますが、服装をテーマにアメリカをイギリスなどのヨーロッパと対比するのが面白いです。

田尻悦也：26 歳です。(笑いが起こる）はじめての日本語での GS です。よろしく。

大田垣　妙子：濱田講座に参加するのははじめてです。京田辺市在住。78 歳(笑い)。神戸ファッション美術館で濱田先生と知り合い、今日は亀岡に来ました。どこでも追っかけて行きたいです。服装史の研究が専門で、TV の「カーネーション」の衣裳を担当しました。あの時は１年間、NHK に拿捕されました。今はファッションデザインも教えています。

西村美保：福岡から来ました。アメリカ服飾社会史研究会のメンバーで、神戸での発表の折に児嶋さんと会いました。ビクトリア朝時代の文化の研究をしてい

て、服飾にも興味があります。濱田先生の著書『アメリカ植民地時代の服飾』にも、興味があります。京都から亀岡は近くて驚きました。

西村好江：以前も濱田講座に参加しました。男性の服飾とか、おもしろくてまた、来ました。

谷　紀子：今日は職業着がテーマですが、私もアメリカ服飾社会史研究会のメンバーで 4.5 年前から研究を続けています。

濱田先生は、恩師の丹野郁教授から、「服飾史の研究は、文献資料に加えて実物資料の考察が不可欠である」と言われ、アメリカの上流階級だけではなく、庶民服研究に 35 年にわたって取り組んでこられています。労働者階級の職業着に関する稀少なこの本の原書に関する情報を大学図書館の”Books in Print”で見つけた時は、「やったー！」と思われたということです。すぐに書店を通じて海外から取り寄せてもらい、翻訳に着手したのが、1986 年で、まだ、子どもさんが小さい頃であり、翻訳の時間を見つけるのは大変だったそうです。

コープランドさんは、2007 年 12 月 8 日に死亡されています。彼は子ども向けのぬりえや絵本などを 41 冊も出版されていて、アメリカではぬりえで歴史を教えることもしています。この本を翻訳して出版の許可を得るときに、コープランドさんから色を派手にしないように言われ、デザイナーの石井きよ子さんが表紙デザインに素敵なイラストを描いて下さったそうです。このコープランド氏の本には、424 名の人物が登場し、歴史的背景や生活状態がビジュアルに描かれています。「今見直すと、コープランド氏は、服飾の専門家の先行研究をよく読み込んでいると思います」と濱田先生は、翻訳に取り組んでおられた時を回顧されて、しみじみと語られました。

ヨーロッパでは、肖像画がよく残されていますが、これには、お金がかかり、上流階級のステータスになっています。では、同じ時期の労働者階級の服飾はどうだったのかというと、実物は残っていないのです。本書の序章に庶民服の研究の困難さが書かれています。

資料②の提示：「19 世紀パリの都市衛生」パリの便所―驚く大杉栄

ヨーロッパは、この時代も、階級制度にしばられているが、アメリカ植民地へ渡ったたちは、ステータスを上げたければ、上って行けるほど自由になっていた。

資料①より

「アメリカ植民地の労働者は、ヨーロッパより高い賃金を得ていたので、アメリカ人は一般にヨーロッパ人よりも質の良い服を身に着けていた。しかし、労働者階級の衣服は一般に単調な色彩であった。この頃のアメリカでは、きゅっとしまる半ズボンより長ズボンの方が実用的であり、ロングコートより、ジャケットが好まれるようになってきた(日本ではこの時代は江戸時代)。しかし、18 世紀のアメリカでは、衣服や携行品で職業が見分けられた。(例：肉屋は青いエプロン・船乗りはモンマス帽とタールを塗ったズボン等)。1771 年にア

メリカで着用されていた衣服の四分の三が地方で生産された布で作られていた。金持ちは、白人崇拝から上質の白のオランダ製の亜麻布を好んだ。」

セッションから

SF：パリの公衆衛生の話がありましたが、日本はどうだったのかと考えていました。ぼくの小さい時は、自分の家は街中でしたが農家にくみ取りをしてもらうと、野菜をもらったりしていたことを覚えています。江戸城の排泄物も専門のくみ取り業者がいて、畑に肥やしとして撒いていたと言われています。

濱田：仙台で育った時には畑で遊ぶと、「野壺にはまらないように」と言われていたと思います。肥やしにする方法はリサイクルですね。フランスでは、窓から排泄物を捨てる人も多くいたようです。肥料として使ったのは、日本人の智恵かもしれません。

KK：乾燥地帯では、牛の糞は燃やす材料としても使われていますね。

HK：モンゴルでは乾燥してゲルの素材にしたり、燃料にして使っていますね。

TK：パキスタンでは糞を塀に固めていました。中国のウルムチでは、トイレに布がかけてあり、首だけ出すようになっているところで、やったこともあります。インドネシアでは、池の真ん中にトイレの場所があり、うなぎの餌にもなり、リサイクルされていました。

イラストの絵を見て：

KS：白色が重要な色というのは、黒人差別から来るのですね。知らなかったです。

YN：シカゴに居るときに、乗って居た車が落ち葉でスリップしてぶつかり、警察が来て質問されたのですが、自分のことを記録するときに、「ジャパニーズ・イエロー」と言われました。中国人と思われ、中国語でからかわれた事もあります。

TO：パリでは肌の色を、白・黄・茶・黒に区別されているが、日本人は黄色か茶色の中に入れられているようです。パリの清潔な雰囲気と比べてトイレはモラル的にもほったらかしにされていて、日本人は汚れていたら他の人の分もきれいにして出るが、ルーブル美術館でもトイレはゴミためのようでした。

KK：1980 年代後半にブラジルにいましたが、12 階建てのマンションに住んでいて、ひとつのフロアが全部自宅だったのですが、トイレは、メイドさんのも含めて３つあり、全部水洗トイレでした。ところが、「流れた汚水はどこに行くのか」と聞くと、どの人も行方は知らないらしく、下水処理の発想がないみたいでした。多分水洗トイレから、覆いのされた川を通り、多分そのまま海に向かって流れていったのではないかと思っています。

SF：私がトイレの話を持って来たようで、すみません。変わってボタンの話しです。日本には、ボタンよりひもを使っていたと思いますが、アメリカにはあるみたいですね。

濱田：ボタンは南蛮文化として日本に入って来て、織田信長の皮袴にはボタンがついていました。陣羽織もボタンでとりはずしていました（信長は、1582 年に本能寺の変で死亡）

KK：ボタンはポルトガル語から来ています。ブラジルでもボタンと言っていました。

濱田：1765 年の挿絵を見ると、使用人のボタンは〇〇家の紋章が入り、アメリカの服飾史の中の衣服の意味があり、逃げられないようになっているのです。

TO：日本にも服飾の差別はありますよ。現在の歌舞伎界でも、俳優さんの奥さん達は、上の俳優さんの奥さんより、良い着物を着てはいけないというような。また、日本に洋服が入って来て、信長が一番はじめに着たそうですね。

濱田：秀吉はキリスト教信者をひどい殺し方をしていますね。

HK：クリスチャンがものすごい勢いで増加したようですね。

KK：大航海時代に植民地を求めて、ポルトガルやスペインがアジアにも来ましたが、キリスト教を広めながら植民地を増やそうとしていたのは、事実のようで、秀吉はそれに気づき、根絶やしにしようとしたという説もありますね。

濱田：フランスの鱈漁師の靴は、チョピンまたは、パタンと言われています。イギリスなどではぬかるみの中を歩くための靴が必要でした。ローマのサウナでは、高下駄のような物をはいたりしていて、靴は上流階級の履いた物のようですね。

HK：船乗りの三角帽は、黒ですか？ベネチアのカーニバルで着ているのを見ましたが。

MM：労働者なのに、スカーフを身に着けておしゃれですね。現在でもこうすればおしゃれだと思います。労働に行く時もおしゃれをするほうがいいなと思いました。インテリアコーディネーターとして、現場に行くのですが、どうしても汚れてもいいような現場服ばかり着ていて。

NT：アメリカのアーミッシュの集落に行ったことがありますが、ボタンを使わず、ピンや針で留めたり、色物もあまり使わない風習があります。

ET：昔からいろいろな職業がある物だと思って聞いていました。

あとから感想を送って来られたかたがあります。

KS：濱田先生のお話や、参加者の方達のいろいろな経験や質問等、本当に楽しく興味深く聞きました。江戸時代の頃の、アメリカの、それも上流階級のファッションではなく、労働者階級のファッションについて詳しく研究され､アメリカの研究者の出された英語の本を翻訳され、また、賞も受けられておられることを知りました。すごいと思います。先生の人間性も感じました。

黒人差別も、色として、白を重要視していることからわかるとか、エプロンでその人の職業もわかることなど、本当にこの年になるまで聞いたこともありませんでした。参加者のお話ももっと聞きたかったです。このような機会を得られてとても感謝しています。

アメリカの航海長
（1776-1781 年）

植民地の大工
（1776 年）

（文責　児嶋きよみ　校閲　濱田雅子）

『アメリカ史にみる職業着』の序論

我々は新聞、月刊誌、旅行記、手紙、日記および会計簿はもとより、18 世紀の一流の芸術家たちが描いた肖像画から、当時のアメリカの上層階級がどのような装いをしていたかをほぼ完全に想い浮かべることができる。これらの有益な資料の成果として、より裕福な人々の植民地時代の衣服の挿絵の作品集が出版されてきた[1)]。だが、果たして我々はその 時代の労働者階級の確かな様子を想い描くことができるであろうか。残念ながら、18 世紀のアメリカには、イギリスが生んだウィリアム・ホガース（William Hogarth, 1697-1764）やマーセルス・ラルーン（Marcellus Laroon, 1679-1772）やウィリアム・ヘンリー・パイン（William Henry Pyne, 1769-1843）といったような、当時の街の一般大衆や地方の農民を描いた人々は生まれなかったのである。また、文学作品も労働者階級の職業着に関する豊富な資料を提供してくれはしない。新大陸の芸術家たちが、その時代の兵士や労働者や開拓者の生き生きとした描写に、その才能を傾けるようになったのは、1 世代あるいはそれ以上 が経過してからである。しかも彼らの肖像画は非常に理想化され、不正確なものであった。 そのためにアメリカ独立革命の時代に生きていた植民地アメリカの一般大衆は、その時代 の歴史に記されることなく、消えてしまったのである。今日の歴史研究者にとって、例えば、ボストンの魚屋とかニュー・ヨークの行商人とか農村バージニアの開拓民の実際の様 子や衣服を非常に正確に確定するのは困難である。

そこで、我々は主に、推測に頼るか、ヨーロッパの資料に依拠する他すべがないのである。18 世紀アメリカの典型的な自由労働者は西ヨーロッパ人であり、彼らは本国を離れてから、わずか 1 世代ないし 2 世代しか経っていない。このことから、彼らの職業着の大半はイギリスの労働者階級の職業着と同じであると結論してもさしつかえないであろう。 ニュー・ヨ

ークやペンシルベニアやノース・カロライナでは例外があった。これらの州に はそれぞれオランダ人やドイツ人やスコットランド高地人の影響が残っていたのである。 また、さらに未開の開拓地にも例外があった。この地域ではインディアンのブランケット・ コート（blanket coat）やレギンス[leggings]やモカシン（moccasins）やヘラジカ皮のブリー チズ［breeches]や房のついた狩猟用のシャツ[hunting shirt]や毛皮の縁なし帽（fur cap）やズボン[trousers]などの衣服が採り入れられていた。イギリスの衣服と植民地の衣服に違いが見られるのは､すべてアメリカの労働者がイギリスの労働者よりも豊かであったためである。

植民地の労働者はヨーロッパの労働者よりも高い賃金を手に入れることができた。そのためアメリカ人は一般にヨーロッパ人よりも清潔で、質の良い衣服を身につけていたのである｡当時の多くの証人たちは､アメリカ人の風采はイギリス人より勝っていると証言し ている。シュバリエ・フェリックス・ドゥ・ボージュールはこう述べている｡「アメリカ 人の街や家や衣服は、どこに行ってもその清潔さが目をひく。このようなアメリカの状態 は、この国を訪れた外国人を他の何ものにも増して楽しませてくれる｡誰もがきちんとした身なりをしている。男性はウールのスーツを着用し、婦人聖職者たちは、一般にいつも 清潔な亜麻布製の白い衣服を着用している。そして、他の国々では悩みの種であるのだが、いとも悲惨な胸が悪くなるようなぼろをまとって、公衆の面前に現れるような人は誰もいない[2)]」と。

しかしながら、18 世紀のアメリカにも貧困や抑圧がなかったわけではない。ヨーロッパにおけると同じように､乞食やストリート・シンガーや逃亡した召使いや失業した船乗りたちが街をうろついていた｡泥棒たちや売春婦たちや詐欺師たちが､都市の最下層部で暮らしていた。泥棒や追い剥ぎが田舎の旅行者や馬車を悩ませた。また、貧しい農民たちは、大西洋のかなたの農民たちと同じように､その地にしがみついてかろうじて命を長らえるだけの暮らしをしていた。しかしながら､アメリカでは貧困や犯罪の問題はヨーロッパほどには蔓延してはいなかった。

アメリカで発展した柔軟な階級制度が植民者の比較的高い生活水準の一因となった。だが、18 世紀初期にはこのような柔軟性がいつも見られたわけではない。イギリスにおけると同様に、当時はより厳格な階級区分が行われており、バージニアやメリーランドやサウス・カロライナの入植貴族階級や、ニュー・ヨークの荘園的特権をもった土地所有者やニュー・イングランドの富裕な商人たちが、小規模ではあるが、影響力のある上層階級を構成していた。世紀が進み、土地がより容易に手に入るようになるにつれて、多くの労働者階級はわずかの努力と幸運とによって、そのささやかな財産を増やして、富裕な中産階級の仲間入りをすることができるようになった｡他の人たちは独立職人や商店主や居酒屋の主人となった。あまり運のなかった人たちは、下層階級の中に閉じ込められたままであった。これらの人たちは借地農や非熟練労働者や船乗りや雇われ人であり､この階級の最下層には年季契約奉公人や無償渡航移住者［18～19 世紀に一定期間の労役を代償としてヨーロッ パからアメ

リカ大陸へ無賃で渡航した移住者――濱田］や貧民や黒人奴隷がいた。本書で扱うのはこれらの中産階級や下層階級の衣服である。

労働者階級の衣服は素材においても裁断においても上層階級の流行の衣服とはかなり異なっていた。労働者階級の衣服は上層階級のものより、デザインが質素でゆったりとしていて、より機能的であった。労働者階級の衣服は粗悪な織物（ホームスパン〈homespun〉が多い）で作られ、富裕な人たちによって愛好された刺繍［embroidery］を施したボタンホー ルや襞飾り［ruffle］や金銀糸入りのモールなどの装飾品はあしらわれてはいなかった。色 彩については、上層階級が明るい緋色や黄色を好んだのに対して、労働者階級の衣服は一 般に単調な色彩であった。金持ちは上質の輝くような白さのオランダの亜麻布を身につけていた。それに対して、労働者階級のシャツ（shirt）やスモック［smock］やエプロン［apron］には、無漂白で粗悪な薄い黄土色の亜麻布が用いられた。

双方の階級によって着用された衣服の種類もやはり異なっていた。紳士たちは流行のニー・ ブリーチズ（knee breeches）をはいており、労働者階級に人気のあったズボンを軽蔑した。 紳士たちはこのズボンを下層社会を象徴する粗末な衣服であると見なした。一方、

労働者たちは、ぴったりしたニー・ブリーチズよりもズボンの方が、労働のためには実用的で快適であることに気づいたのである。ニー・ブリーチズを所有した人たちも、それを革などの丈夫で長持ちする素材で作らせたであろう。さらに労働者階級は、流行のロング・コート（long coat）よりもジャケット[jacket]を好んだ。下層階級の帽子は鍔が巻き上げられずに全 体に下がっていた。それとは対照的に、紳士たちは狩猟などのスポーツをする時以外には、 帽子を巻き上げていることがほとんどであった。あらゆる階級が鬘［wig］を被っていた。ある外国人客は、1740 年代にこう述べている。「誰もが鬘を被っていた。田舎者も日雇い労働者も、要するに労働者たちは誰もが頭に鬘を被って日々の仕事をしている [3)]」と。農夫たちは耕作中でさえも鬘を被っていた。

労働者にはフォーマル・スーツ（formal suit）のような衣類はめったに持てるものではなかった。フォーマル・スーツの持ち主は、仕立てが良ければこの衣服が 2 世代ないしそれ以上もってくれることを期待したであろう。そのためフォーマル・スーツは大切にされ、日曜日の教会での礼拝や結婚式や葬式のような特別の場合に備えておかれたのである。上質の布や上質の亜麻布を入手するのは非常に困難だったので、他の種類の衣類も念入りに 保存されていた。ガウン（gown）や襞飾りの付いた亜麻布のボディ・シャツ（body shirt）やモール飾りが付き、鍔が反りあがったビーバー帽（beaver hat）や銀のバックル付きの靴はすべて貴重品であった。

衣服の裁断と色は社会階級を正確に表す指標であった。18 世紀のアメリカでは、通行人が身につけている衣服や携行している身のまわり品を見ただけで、その人の職業を見分けることができた。靴直しは黒ずんだ革のエプロンでそれとわかり、肉屋は青いエプロンと汚れを防ぐための腕カバーと鋭い刃物と腰に結び付けられたナイフ・ケースで、船乗りはモンマス帽[Monmouth cap]とタールを塗ったズボンで、御者は長いフロック（frock）と牛飼い用

の長い太い鞭でそれとわかった。上層階級の特定の職業についてもこれと同じことが言えた。例えば、医者は黒いスーツと「医者用の鬘」と金の柄の付いた杖からそれとわかった。

婦人労働者もやはり容易に見分けることができた。婦人労働者のガウンは上層婦人のものより質素で、丈が短かった。彼女たちはスカートの下にたが（hoop）をつけておらず、目の粗い亜麻布あるいは安価な木綿のエプロンは、襞飾りや装飾が施されたりしたエプロンよりもずっと粗末ではあるが、機能的であった。婦人労働者のもとでは、植民地の貴婦人にとって非常に大切な入念にプリントされた織物や刺繍を施された布を見かけることはめったになかった。婦人労働者はその階級が手にすることができる簡素な格子柄や縞や水玉で満足しなければならなかった。

既製服を店で入手することは可能であったが、既製服産業は非常に小規模なものであった。既製服は下層の特定の職業だけに向けて作られたものであり、極めてありきたりのものであった。船乗りの衣服は海岸通りの「既製服屋」で既製服を購入できた。南部農村のプランテーションの黒人奴隷たちには、既製のジャケットと「ニグロ・クロス」（negro cloth）や「ニグロ・コットン」（negro cotton）製のブリーチズ――これらは、イギリスで作られ、購入されたものである――があてがわれることもあった。兵士たちには、入手可能な場合には、既製の軍服（uniform）があてがわれた。実際、議会はアメリカ独立革命中にこのような多くの軍服をフランスから輸入したのである。また、労働者の革のブリーチズもやはり既製品であった。これらの衣服は安価であるにもかかわらず、丈夫であり、家庭で作るのは大変むずかしかった。そこで、商人たちは労働者たちのなかに、このような衣服の恰好の市場を見出したのである[4)]。

植民地における織物製造は家内工業として始まったものであり、特に、貧乏人の階層や農村地帯で行なわれた。粗悪なホーム・スパンの亜麻布や羊毛が、北部と中部のあらゆる植民地で生産された。多くの家族が自分たちが身につけるため、あるいは近隣で余剰品を売ったりするために、十分な量のホーム・スパンの織物を製造することができた。アレキ サンダー・ハミルトン（Dr. Alexander Hamilton, 1755-1804）の試算によると、1791 年にアメリカ合衆国で着用されていた衣服全体の４分の３が地方で生産された布で作られていたという。

＊　＊　＊　＊

本書は 1710 年から 1810 年の時期を包括している。大量生産の既製服が利用できるようになるまでは、労働者が身につけていたスタイルには、100 年経ってもほんのわずかな変化しか見られなかった。これは注目すべきことであろう。このように、例えば農民や御者や船乗りの衣服には、本書に示された 100 年間にわたって、重大な変化は見られなかったの

である。都市労働者と熟練職人たちの衣服は、彼らが上層階級のファッションを意識的に模倣したため、大きく変化した。

1) E.g., Alice Morse Earle, *Two Centuries of Costume in America* (New York, 1903); and Edward War- wick, Henry C. Pitz, and Alexander Wyckoff, *Early American Dress: The Colonial and Revolutionary Periods* (New York, 1965).
2) Chevalier Felix de Beaujour, *Aper u des Etats Unis*(Paris, 1814).
3) Phillis Cunnington, Catherine Lucas, and Alan Mansfield, *Occupational Costume in England from the Eleventh Century to 1914* (London, 1967), p.31.
4) Claudia Kidwell and Margaret Christman, *Suiting Everyone* (Washington, D.C., 1974).

(pp. ix - xvi)

（文責　濱田雅子）

【再版のお知らせ】

P.F.コープランド著、濱田雅子訳『図説　初期アメリカの職業と仕事着』（悠書館、2016 年 2 月）

本書は P.F.コープランド著、濱田雅子訳『アメリカ史にみる職業着』（せせらぎ出版、1998 年）の普及版である。

［定価］本体 2,800 円＋税
［体裁］四六判・304 ページ
［ISBN］978-4-86582-009-6

1710 年から 1810 年までの 100 年間、新聞・雑誌に取り上げられたり肖像画などが残されたりしている上層階級とちがい、一般大衆や地方の農民がどのような職業に就き、どのような服を身にまとっていたのかを示す遺品は皆無に等しい。しかもこの時代のアメリカには、イギリスのホガースやパインのような下層階級の人びとを描いた画家が生まれなかったので、植民地時代のアメリカの一般大衆は、その時代に描写されないまま、歴史から消えてしまった。

著者コープランドは、移民としてやってきた人びとの本国（大多数がヨーロッパ）の絵画資料をもとに、アメリカの大衆の生活と服装を類推する方法をとり、さらに、逃亡奴隷を捕えるための広告や旅行者の明細書などにもとづいて、みずからイラストをおこし、仕事着の材質から着用の仕方まで詳細に解説をほどこした。図版はイラスト 223 点、写真 36 点にのぼる。

本書は、歴史から取り残されてしまった 18 世紀アメリカの中産階級や下層階級の生活の実相を、体系的かつビジュアルによみがえらせた貴重な文献である。

濱田雅子の服飾講座

「服飾から見た生活文化」シリーズ　その６

日時：2015 年 6 月 13 日（土）　1:30～3:00
場所：京都府国際センター　京都駅ビル 9 階　　参加費：600 円
(JR 京都駅南北自由通路伊勢丹百貨店南エレベーター利用)
Tel & Fax 075-342-5000

タイトル：小説『ルーツ』のなかの クンタ・キンテの服装をめぐって

講座のご案内

本報告は濱田の博士論文が元になっている『黒人奴隷の着装の研究―アメリカ独立革命期ヴァージニアにおける奴隷の被服の社会的研究―』（東京堂出版、2002）の一部の内容紹介である。濱田は本書のあとがきに、本書執筆の動機について、以下のように書いている。

本書執筆の動機は、アメリカ黒人作家アレックス・ヘイリー作、安岡章太郎、松田銑共訳の『ルーツ』（社会思想社、1977 年）にある。ヘイリー氏がアフリカのジュフレの村をたずね、みずからの先祖を探しあて、7 代 200 年を描いた小説『ルーツ』は、世界的なベストセラーとなり、ピューリッツァー賞を受賞した。この作品はテレビドラマ化され、話題作として脚光を浴びた。作品中の「主人公のクンタ・キンテが着ていたものを考証できるのは、歴史学と服飾史学の研究に従事しながら、アパレル産業の現場で実際の服作りに携わって来たあなたしかいないですよ。」とアメリカ黒人史のご専門家で、神戸大学文学部の恩師である故本田創造先生から「奴隷の 着るもの 」研究をお勧めいただいた。これは 1985 年ころのことである。「奴隷の 衣服 」とおっしゃらなかったのが印象的で、今も鮮明に記憶している。師のご助言こそ、私が「奴隷の着るもの」の解明に取り組みだした直接的な動機である。私自身は、このようにお勧めいただく前に、『ルーツ』の翻訳書を読んだり、テレビドラマをビデオで観たりしていたのだが、小説やテレビドラマのなかの奴隷の被服描写に疑問をいだいていた。

濱田は博士の学位を取得するに先立ち、ポルトガルのリスボンで開催された ICOM の服飾に関する国際委員会で”Clothes for Slaves in Virginia in Revolutionary America,”というテーマで英語で研究発表を行った。発表後、意外にも会場から割れるような拍手が湧き起こった。大きな戸惑いを隠せなかった。そして、会議終了後、「貴女の研究内容をハリウッドにもって行くといいですよ」とドイツ人女性から言われたのである。彼女の言葉を聞き、なぜか胸がドキドキした。

ICOM（International Council of Museums：国際博物館会議）は、1947 年に創設された国際的な非政府機関である。世界 137 カ国（地域を含む）から約 3 万人の博物館専門家が参加している。地球規模で博物館と博物館専門家を代表する団体として、UNESCO と協力関係を保ち、国連では経済社会理事会の諮問資格を有している。ICOM には、国別に組織された 114 の National Committees（国内委員会）と、博物館の様々な専門分野に即して組織された 31 の International Committees（国際委員会）がある。それぞれに年次会合などを開催し、博物館にかかわる情報の交換や知識の共有が図られている

濱田が研究発表をしたのは、上記の 31 の委員会の中の服飾に関する国際委員会である。その後、ハリウッドには行っていないが、今回、報告させていただくのは、衣服の実物が残存していない奴隷の被服の実態に関する問題である。

さて、濱田はこの実態をどのようにして解明したのか。この問題に対する答えは、6 月 13 日の Global Session でのお楽しみということにさせていただこう。本報告が『ルーツ』の主人公のクンタ・キンテが着ていたものを考証する手がかりになれば幸いである。

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

１．はじめに

本報告の概要については本講座のご案内に書いたとおりである。このレポートでは本研究の目的、研究方法、報告の要点をまとめてみた。拙著『黒人奴隷の着装の研究―アメリカ独立革命期ヴァージニアにおける奴隷の被服の社会的研究―』（東京堂出版、2002）の目次は下記のとおりである。

目次

序章　（目的と方法研究史　ほか）

第１章　歴史的背景

（アメリカ独立改革と合衆国の成立　ヴァージニア 植民地の成立　ほか）

第２章　史料としての逃亡奴隷広告
（被服描写の史料的価値　被服情報の数量化ほか）
第３章 逃亡奴隷の着装情況--その数量的アプローチ
（奴隷の被服の種類と素材の特徴/男子の逃 亡奴隷の着装実態　ほか）
終章
付録　資料編

２．研究の目的

近年のアメリカ史学会では計量的方法や、社会史、大衆運動史など新しい分野の研究の進展にともない、従来の研究領域の深化と、新たな総合化、展望が急務とされている。本研究は、アメリカ独立革命期の奴隷の被服をテーマとし、新しいアメリカ社会史研究の一分野であるいわゆる「マテリアル・カルチャー」の領域の研究として位置づけられる。「マテリアル・カルチャー」とは人間生活の衣食住に関する物質文化を意味している。西洋服飾史の先行研究は、特に僅少である。報告者は、丹野郁らの西洋服飾史研究を踏まえて、アメリカ植民地時代から独立革命期の衣服文化について、下層階級についても研究を続けてきた。本研究では奴隷の被服を服種や素材とその供給の実態に着眼して考察した。

考察対象とした時期はアメリカ独立革命期の 24 年間（1766－1789 年）であり、地域はアメリカ最初の植民地であったヴァージニアである。この研究で取り上げた「被服」には、衣服のほかに帽子、靴、靴下などの付属品も含まれる。

３．研究方法

本研究では第一に、ヴァージニア・ガゼット（*Virginia Gazette*）紙（1766-1789）などにみる逃亡奴隷の新聞広告の中から被服に関する描写を抽出し、服種、素材および男子の逃亡奴隷の着用実態を考察した。

第二はヴァージニア・クロス製の男子用スーツの調査、Valentine Museum（ヴァージニア州リッチモンド）所蔵の奴隷が作ったパッチワーク・キルトの遺品調査、コロニアル・ウィリアムズバーグ振興財団織物部門における織物調査、考古学部門における発掘物の調査を行った。

４．本報告の要点

（１）ヴァージニアの黒人奴隷制度の成立と特徴

ヨーロッパ人によるアフリカ人奴隷貿易は、誰が何時頃はじめたのか。それはアフリカに進出したポルトガル人であり、15 世紀のことである。1517 年、スペインの植民地宣教師ラス・カサスは植民地に来住するスペイン人に黒人奴隷 12 人の所有を認める提案をした。西半球のヨーロッパ人植民地が発展した 17 世紀になると、多数の奴隷が西半球に持

ち込まれた。西インド諸島、ブラジル、イギリス領北アメリカなどが急速に発達した 18 世紀は、奴隷貿易の最盛期であった。

17 世紀半ばまでのイギリス領植民地の労働力の主力は白人年季奉公人であった。しかし、17 世紀も終わりに近づくにつれて、ヴァージニアやメリーランドではタバコ栽培が急激に発展し、さらに 18 世紀に入って、サウス・カロライナやジョージアでは米、続いて藍の栽培が促進され、生産が増大していった。それにともなって、従来の白人年季奉公人制度から黒人奴隷制度への移行をみることになった。

（２）ヴァージニアの奴隷の階層と被服の関係ー先行研究からー

18 世紀北アメリカ南部の奴隷は、防寒や自然から身を守るといった目的だけではなく、プランターの側仕えの上級の黒人奴隷、家内の職人奴隷および農園の耕作奴隷といった３階層の奴隷には、それぞれのステイタスを表示する被服が支給されていたのである。しかしながら、アメリカにおける先行研究のこのような内容は、奴隷の被服の概観にとどまっている。

私はこのような先行研究の現状を打開するために、本研究に取り組んだ。上流階級の衣服は博物館に所蔵されているが、下層の奴隷の被服の実物は全くと言っていいほど残っていない。しかし、上流階級の服飾研究だけに終始していては、衣生活の実態を知ることはできない。本研究では奴隷被服に関する情報としての逃亡奴隷広告の史料価値に注目して、奴隷の被服の種類と素材、および男子の逃亡奴隷の着用実態を分析した。

（３）逃亡奴隷広告における被服描写に関する考察

以上の考察から、アメリカ独立戦争前後の８年間（1767-1770 年、1776-1779 年)に、黒人奴隷が逃亡時に着用していた被服の種類の組み合わせの実態が明らかになった。

奴隷の被服の実態をとらえるために、対象年の８年間の逃亡奴隷広告に登場する逃亡奴隷の服種を数量に表してみた。その結果、シャツやコートやブリーチズの数量が他の服種より大きいということが明らかになった。上衣は多いものから並べると、シャツ、コート、ジャケット、ウェストコートの順になっている。下衣はブリーチズがトラウザーズより多用されていることが明らかである。しかし、これでもまだ奴隷被服の実態を十分に説明しているとは言えない。

そこで、これらの服種を用途別に数量化してみることにした。

その結果、上衣が下衣よりも数量的に多いこと、上衣と下衣に比べて、帽子や靴や靴下の量が少ないことが明らかになってきた。そこで、さらに用途別の比率を見てみた。その結果上衣、下衣、帽子、靴、靴下の順に割合が減少していることが明らかとなった

奴隷の被服の数量と用途別の比率は明らかになってきたが、逃亡奴隷の個々人の被服の組み合わせはどのようだったのか。次に、このような観点から数量化を試みてみた。つまり、奴隷の被服の全体的な数量の問題から、奴隷ひとりひとりにとっての被服のあり方はどうであったのか、という問題に踏み込んで考察してみた。

以上を前提として、逃亡奴隷の被服の組み合わせのパターンを８とおりに分類した。

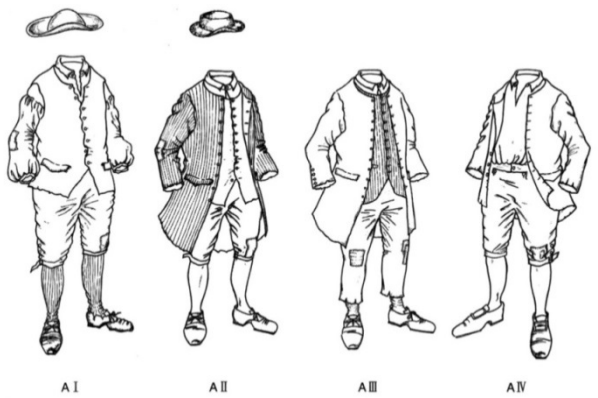
A グループは靴の記載がある逃亡奴隷であり、着用している被服の組み合わせによって、４グループに分類した。
B グループは靴の記載がない逃亡奴隷であり、着用している被服の組み合わせによって、４グループに分類した。

奴隷には上流階級の衣服と同じ形態の衣服がお仕着せとして支給されるか、あるいは粗悪な素材で奴隷用に作らせた衣服が支給されていた。そこで、これらの８グループの着装を以下に見る表とイラストに表すことによって、奴隷の着装の実態をイメージ化してみた。このイラストの下絵は濱田が描き、長女の橋本裕佳子が清書をして完成させたことをお断りしておく。

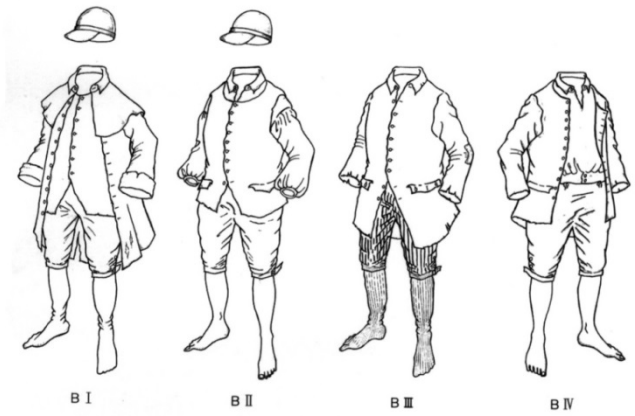
男子逃亡奴隷の被服の組み合わせ

	上衣	下衣	被り物	靴下	靴
AⅠ					
AⅡ					
AⅢ					
AⅣ					
BⅠ					
BⅡ					
BⅢ					
BⅣ					

上の表の白い部分は該当の被服を身に着けていないことを表している。
Ａグループ



Ｂグループ



以上の考察から、アメリカ独立戦争前後の８年間に、黒人奴隷が逃亡時に着用していた被服の種類の組み合わせの実態が明らかになった。その結果を以下にまとめる。

第１に、AⅠ（帽子から靴までそろっているタイプ）は 149 人中 10 人（７％）と極めて少ないこと。

第２に、逃亡奴隷広告の逃亡者の被服の記載に靴の記載があるケースは、149 人中 40 人（27%）、つまり４分の１である。その原因として考えられるのは、１．靴を持っていない。２．靴が痛くてはけない。３．靴が古くなってはけない。という三つのケースが考えられる。奴隷の靴の形、はきごこち、素材、耐久性は今後の研究課題である。

第３に、BⅡ（上衣と下衣を着て、帽子を被っている）は 149 人中 31 人（21%）、つまり、5 分の１であること。

第４に、BⅣ（上衣と下衣のみを着ている）は 149 人中 74 人（50%）であること。

次に奴隷に支給されたズボンの種類について考察した。

この時代には家内奴隷も農園の奴隷もきわめて動きにくい、機能性に乏しいブリーチズをあてがわれていることが多かった。ブリーチズは元来、上流階級の男子の衣服であり、プランテーションの労働には不適当な衣服であった。そのため、なめし皮製の伸縮性のあるブリーチズが用いられる場合もあった。この種のブリーチズは、18 世紀を通じて、英国の紳士の乗馬用の日常着として好まれていた。ズボンは後の流行のスタイルとなり、労働者の衣類となった。さらに種々のスタイルで男性によって、今日にいたるまで、着用され続けている。長ズボンの着用はアメリカ独立革命後、増加していった。

（４）実物資料の調査

・コロニヤル・ウィリアムズバーグ振興財団 DeWitt Wallace Gallery of Decorative Arts 所蔵のイギリス製のお仕着せのコート（口絵７）。ヴァージニアにもたらさられ、御者など上級の白人の召使と黒人の召使によって着用されていた、と考証されている。
・同館所蔵の御者のコート
・ The Valentine Museum, Richmond, Virginia 所蔵のパッチワーク・キルト（奴隷により製作　1800 年頃）
・ヴァージニア州コロニヤル・ウィリアムズバーグ振興財団の Department of Archaeological Research 所蔵の鋏の発掘品（ パレス・プランテーション出土品）
・同研究所所蔵の指貫の発掘品（奴隷が使用　パレス・プランテーション出土品）
・同研究所所蔵の針の発掘品（奴隷が使用　パレス・プランテーション出土品）
・1770 年代のウィリアムズバーグで使われていた織機の複製品
・18 世紀の布を再現している Max Hamrick 氏のビデオ映像の紹介　同氏が織った布の紹介

最後に、本研究についてのまとめをおこなった。

従来の中流階級以上の服飾に関する研究では、貴族趣味的な服飾美に着眼して、その実態を博物館に所蔵されている実物の遺品の調査により明らかにする方法が主流をなしてきた。中流階級以下の衣服は、貴族スタイルの衣服から装飾を取り去った、粗末な素材を用いたものと見なされ、研究対象としての価値が認められない傾向が強かったのであった。また、中流以下の衣服の遺品はきわめて僅かしか残存していない。本研究で対象としたアメリカ独立革命期ヴァージニアの黒人奴隷の衣服は、現地での調査の結果、１枚も残存していないことが判明した。

「奴隷の被服をいかにイメージ化するか」が本研究の課題のひとつである。困難な資料状況を打開する鍵は、逃亡奴隷広告の中の被服情報を丹念に数量化し、得られたデータから実態を明らかにすることであった。本研究による男子逃亡奴隷の衣服着用実態の解明結果が関連領域に役立てば幸いである。詳細は濱田の前掲書をご参照いただければと思う次第である。

（文責　濱田雅子）

濱田雅子の服飾講座

「服飾から見た生活文化」シリーズ　その７

場所：京都府国際センター　京都駅ビル９階　　参加費：600 円
(JR 京都駅南北自由通路伊勢丹百貨店南エレベーター利用)
Tel & Fax 075-342-5000

タイトル：フランス・ファッションのアメリカへの伝播

講座のご案内

フランス革命はファッション史上にも新しい始まりを告げた。本講演では、このファッション大革命後の総裁政府時代(1795～1799)に誕生した風変わりなニューモードである“Merveilleuses”（メルヴェイユーズ）のファッションに着目し、このファッションがフランスからアメリカへどのような方法で伝播したのかという問題を通して、当時アメリカに住んでいたふたりのフランス人女性のアメリカ社会への融合、あるいはアメリカ社会における疎外という興味深い問題を考えてみようと思う。この問題を繙くに当たって、フランス革命によって、伝統的なフランス上流社会から失墜して、アメリカに移住してきたフランス人女性のジョゼフィーヌ・デュポン(Josephine du Pont)とアメリカ生まれではあるが、10 年間、フランスでの生活経験のあるフランス人女性マーガレット・マニゴー(Margaret Manigault)との間に、1789 年から 1800 年の間に交わされた 30 通の書簡を資料に用いた。

ここで扱う書簡は以下である。

Betty Bright P. Low, Of Muslins and Merveilleuses: Excerpts from the letters of Josephine Du Pon and Margaret Manigault, *Winterthur Portfolio* 9, 1974, The Henry Francis Du Pon Wintertur Museum, pp.29-75.

デュポン家はフランス革命から逃れてきたエルテール・イレーネ・デュポン（ Éleuthère Irénée du Pont, フランスの重農主義経済学者デュポン・ド・ヌムール Du Pont de Nemours の子）を始祖とし、彼がウィルミントンを流れるブランディワイン川畔に設立した火薬工場の発展とともに勢力を拡大していった。その後身であるデュポン社は現在アメリカ最大の総合化学会社に成長し、国際化学資本の一つとしてデュポン財閥の中核企業となっている。ジョゼフィーヌ・デュポンはこのアメリカを代表する大富豪の創始家族の一人であった。

ジョゼフィーヌ・デュポン(1770-1837)は、ルイ 16 世の末の弟に使える父親を持ち、若い頃、ヴェルサイユ・ミリュに移り住んで、正式の貴婦人教育を受けている。そして、デュポン家の長男ヴィクトール・デュポンとの結婚{1794 年 3 月}により、デュポン家の一員となる。デュポン家は 1799 年、フランス革命による失墜のため、ニューヨークへ移住する。

マーガレット・マニゴー(1768-1824)の夫ガブリエル・マニゴー(Gabriel Manigault)の先祖は、ユグノーの逃亡者として、フランスからアメリカのサウス・カロライナの首都チャールストンに移住してきており、奴隷を使った大規模なプランテーションを持つ農園主で、米と綿花を主要作物として栽培していた。マニゴー婦人もチャールストンへ移住後、大プランターの妻としてのゆるぎない地位を築いたのである。

本講演では、上記の二人のフランス人女性の間にかわされた貴重な書簡を分析することにより、ファッションの伝播において、これらの書簡がどのような役割を果たしたのか、また、彼女たちのファッション観や価値観や意識構造は果たしていかなるものであったのか、という問題を究明する。

参考文献　濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）第４章

（文責　濱田雅子）

■　目次

■　第１章　北アメリカの自然と衣文化
■　第２章　プランテーションの衣文化
■　第３章　アメリカらしさの萌芽
■　第４章　フランス・ファッションへの憧憬
■　第５章　ローウェル工場の日々
■　第６章　西部開拓時代の衣生活
■　第７章　家庭裁縫から既製服生産へ
—1840 年代～1920 年代のパターン・システム—
■　第８章　衣服大衆化の時代

講座のレポート

参加者（敬称略）：亀田博、楠見静子、濱田雅子、児嶋きよみ　４名

フランス革命はテルミドールの反動（1794 年）により、政権が大ブルジョアジーの手に掌握されて終結をみる。その後、歴史の舞台は総裁政府時代（1795～99 年）から執政官政

府時代(1799 ～1804 年）を経て、ナポレオン第一帝政時代（1804～14 年）へと移行し、古代調衣裳を大胆にまとった新興ブルジョワジーの女性グループ「メルヴェイユーズ」のファッションが一世を風靡する。このグループは男子のアンクロワヤブルと並んで特異なグループとして知られた。

写真１

写真２

写真３

写真（１）は、1799 年、初期のメルヴェイユーズである。高いウエストラインと白を基調としたシンプルなシルエットから、直線的な印象を受ける。

写真（２） は、1805 年のメルヴェイユーズである。前期のものと基本的なシルエットは変わらないが、スカートの裾に縁飾りが施されていることが確認出来る。

最後に 写真（３） は、1814 年頃、その装飾が最高頂に達したともいえるメルヴェイユーズの姿である。高さを強調した帽子、装飾過剰な襟元とマムリュク袖（mameluk ）に特徴がある大変奇妙な外見のファッションである。

モード誌が普及する以前の中心的な媒体はファッション・ドールである。この人形は中世末から出現するが､ファッションがフランスの産業の一つとして勢力を伸ばしたルイ王朝の 17～18 世紀にとくに大活躍をした。

第二の媒体は定期刊行のモード雑誌である。印刷技術の発達により、服飾の流行を伝達するモード誌が初めて登場するのは 1768 年である。アメリカの女性たちは 18 世紀末には、*Journal des Modes, Costume Prisiens* あるいは *Gallery of Fashion* から、フランスやイギリスのファション情報を入手していた。

第三の媒体は書簡である。

（デュポン家）ヴィクトール・デュポンはジョゼフィーヌと結婚後、公使の秘書としてアメリカ合衆国に赴き、アメリカに到着後、３ヶ月も経たないうちに、チャールストンの領事を命ぜられた。デュポンは 1795 年９月、そこで生活を始めた。そして、その後、1799 年にはジョゼフィーヌを含め、デュポン一家は慌ただしくアメリカのニュー・ヨークへ移住している。彼らの移住の背景は何であろうか。その理由として、まず第１に考えられるのは、フランス革命によるデュポン家の失墜である。

（マニゴー家）最初（１代目）のマニゴーは、ユグノーの逃亡者としてアメリカのチャールストンに移住して来ている。ユグノーとはフランスのカルヴァン派のことである。この時外国に逃れていったユグノーに、ガブリエルの３代前のマニゴーが含まれていた。チャールストンに移住して来たマニゴーは、ここで米と綿花の大規模なプランテーションを持つ農園主となったのである。多くの農園主がそうであったように、３代前のマニゴーも多数の奴隷を使って大きく成長していくことになる。この子孫がマーガレット・マニゴー婦人の夫であるガブリエル・マニゴーである。

ジョゼフィーヌ・デュポンとマーガレット・マニゴーはパリで流行するメルヴェイユーズのファッションに遅れまいとして、情報の入手に余念がなかった。ここにはフランス貴族としての保守性とはうらはらに新しいファッションをいちはやく取り入れて行こうとする進歩性が見られる。彼女たちの書簡では下着については書かれていないが、透けた古代調のシュミーズ型ローブと短いテイトウス型ヘアスタイル（口絵９）という新型モードへの傾倒は、進歩的要素として評価される。

本講演で扱った書簡の歴史的意義と限界は、次の四点に集約されるのではないでしょうか。

① 服飾の技術面や装飾面からは考察しにくい、１８世紀末アメリカという異文化社会に生きるふたりのフランス人女性のファッションをめぐる深層心理の解明が可能となった。その意味で歴史的価値の高い書簡である。

② だが、逆に服飾の実物資料がふたりの女性の間では暗黙の了解事項となっているため、書簡を読む第三者には、話題が理解しにくい場合がある。今後、例えばシャポー・ナカラなど実物資料の調査が肝要である。

③ ないものねだりかもしれないが、ファッションに限定して書簡が紹介されているため、ふたりの女性の政治への関わりが見えない。

④ 1801 年から 1824 年の書簡が公開されると、この時期のふたりの女性の政治に対する考え方や社会参加の興味ある側面が解明できるのではないでしょうか。

（文責　　濱田雅子）

ご案内

今回の濱田講座は、9 月にみなさまにお送りしたはずの案内が全体に送られていず、10 月の開催日の直前に再度お送りしましたが、すでにそれぞれの方は予定を入れられていたようで、参加者が少なく、残念でした。それで、濱田雅子先生にお願いして、再度同じ内容で、更にバージョンアップして、2 月 7 日（日）1:30～3:00 に亀岡のガレリアで開催します。近くなれば、アメリカに移住してきたフランス人女性のジョゼフィーヌ・デュポン(Josephine du Pont)とアメリカ生まれではあるが、10 年間、フランスでの生活経験のあるフランス人女性マーガレット・マニゴー(Margaret Manigault)との間に、1789 年から 1800 年の間に交わされた 30 通の書簡のなかから、ピックアップした英文の書簡も事前にお送りし、1800 年前後の婦人達の交わす英語を味わっていただきたいと思っています。

（文責　　児嶋きよみ）

濱田雅子の服飾講座

「服飾から見た生活文化」シリーズ　その８

日時：2016 年２月７日（日）　1:30～４:00

場所：ガレリアかめおか　３階第４会議室　　参加費：　600 円

〒621-0806 京都府亀岡市余部町宝久保１－１ Tel 0771-29-2700

タイトル：フランス・ファッションのアメリカへの伝播

講座のご案内

フランス革命はファッション史上にも新しい始まりを告げた。本講演では、このファッション大革命後の総裁政府時代(1795～1799)に誕生した風変わりなニューモードである“Merveilleuses”（メルヴェイユーズ）のファッションに着目し、このファッションがフランスからアメリカへどのような方法で伝播したのかという問題を通して、当時アメリカに住んでいたふたりのフランス人女性のアメリカ社会への融合、あるいはアメリカ社会における疎外という興味深い問題を考えてみようと思う。この問題を繙くに当たって、フランス革命によって、伝統的なフランス上流社会から失墜して、アメリカに移住してきたフランス人女性のジョゼフィーヌ・デュポン(Josephine du Pont)とアメリカ生まれではあるが、10 年間、フランスでの生活経験のあるフランス人女性マーガレット・マニゴー(Margaret Manigault)との間に、1789 年から 1800 年の間に交わされた 30 通の書簡を資料に用いた。

ここで扱う書簡は以下である。

Betty Bright P. Low, Of Muslins and Merveilleuses: Excerpts from the letters of Josephine Du Pon and Margaret Manigault, *Winterthur Portfolio* 9, 1974, The Henry Francis Du Pon Wintertur Museum, pp.29-75.

デュポン家はフランス革命から逃れてきたエルテール・イレーネ・デュポン（ Éleuthère Irénée du Pont,フランスの重農主義経済学者デュポン・ド・ヌムール Du Pont de Nemours の子）を始祖とし、彼がウィルミントンを流れるブランディワイン川畔に設立した火薬工場

の発展とともに勢力を拡大していった。その後身であるデュポン社は現在アメリカ最大の総合化学会社に成長し、国際化学資本の一つとしてデュポン財閥の中核企業となっている。ジョゼフィーヌ・デュポンはこのアメリカを代表する大富豪の創始家族の一人であった。

ジョゼフィーヌ・デュポン(1770-1837)は、ルイ 16 世の末の弟に使える父親を持ち、若い頃、ヴェルサイユ・ミリュに移り住んで、正式の貴婦人教育を受けている。そして、デュポン家の長男ヴィクトール・デュポンとの結婚{1794 年 3 月}により、デュポン家の一員となる。デュポン家は 1799 年、フランス革命による失墜のため、ニューヨークへ移住する。

マーガレット・マニゴー(1768-1824)の夫ガブリエル・マニゴー(Gabriel Manigault)の先祖は、ユグノーの逃亡者として、フランスからアメリカのサウス・カロライナの首都チャールストンに移住してきており、奴隷を使った大規模なプランテーションを持つ農園主で、米と綿花を主要作物として栽培していた。マニゴー婦人もチャールストンへ移住後、大プランターの妻としてのゆるぎない地位を築いたのである。

本講演では、上記の二人のフランス人女性の間にかわされた貴重な書簡を分析することにより、ファッションの伝播において、これらの書簡がどのような役割を果たしたのか、また、彼女たちのファッション観や価値観や意識構造は果たしていかなるものであったのか、という問題を究明する。

往復書簡の英文を一部、事前にお送りさせていただきます。お目通しいただき、タイムスリップして、ディスカッションいたしましょう。

参考文献　濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）第４章

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

参加者（敬称略）：向井三貴（長岡京市）、亀田博（大津市）、河原林成行（亀岡）、河原林（奥様・亀岡）、谷紀子（京都市）、西村美保（福岡市）、濱田雅子（神戸市）、児嶋（亀岡）　　８名

上記の案内をもとに、濱田服飾講座第 8 回目が亀岡で始まりました。参加者は上記のように全国各地から来られています。また、この服飾講座も８回目になりました。

まず、濱田先生の再版された新刊本の紹介です。

ピーター・コープランド著・濱田雅子訳（2016），『図説　初期アメリカの職業と仕事着～植民地時代～独立革命期』，悠書館

「歴史から取り残されてしまった 18 世紀アメリカの中産階級や下層階級の生活の実相を、体系的かつビジュアルによみがえらせた他に類のない書」との帯がついています。

参加者の自己紹介

西村：福岡教育大学英語教育学科の教員をしています。昨年は、アメリカ社会の服飾についての発表をしました。

谷：高校の家庭科の非常勤講師をしています。19 世紀のファッションとして、「ズボンをはいている女性」という発表をしました。

亀田：大津市在住でツアーガイドをしています。先月（1 月）には、バリ島へツアーで行きました。32.3 度もありました。バリ島はインドネシアで唯一ヒンズー教徒の島であり、まだ安全です。今年は 5 月にキューバ旅行の予定でしたが、現在ホテルが全く取れず、ネパール行きに変更したところです。

濱田：ネパールは地震のあとがまだひどいでしょう？

亀田：復旧はまだまだですが、世界中からの支援もあり、観光産業としては大丈夫です。でも暮らしはまだまだ復旧に差がありますね。

河原林：66 才です。昨年、会社（堀場製作所）を退職した技術屋です。勝手気ままな生活をしていますが、今回の服飾というような分野は未知の世界で興味があってきました。今までは美とか、服飾には無頓着でした。今回の英文などの紹介で「デュポン」社が出て来たので、これにも興味を引かれました。

河原林（奥様）：「今回は GS が英語でないから」と言われ来ました。また、フランス革命後、アメリカに移住した人々の、特に女性がどんな気持ちであったのかということにそそられて来ました。綿帽子のように飛んでいる自分のもちょっと触れられる部分があるのかと興味を持っています。するどい視線に見つめられたらどうしようとも思っていました。

向井：最近、東京ギフトショーでグッドデザイン賞を取った友人がいます。デザインはやはり歴史と無関係ではなく、つながっていると思い、今回は興味を持ちました。本職は家のリフォームデザイナーですが、ラオスの服飾の紹介も 10 年以上しています。大山崎駅前のギャラリーで、毎年ラオス服飾品の展示販売をしていて、ラオスの少数民族の手工芸品を販売した収益の一部で、ラオスの農村部の学校を 2 校建てました。今年はそのギャラリーが使用できなくなり、場所を探していうるのですが、まだ見つかっていません。

「今回はデュポン婦人とマニゴー婦人という 1700 年代後半から 1800 年代初頭のフランスからアメリカに移住した婦人達のフランスファッションへの憧憬をふたりの間にかわさ

れた書簡をもとに、フランス女性ふたりのファッション観を通して、アメリカ社会との共存あるいはアメリカ社会での疎外感という興味深い問題を追ってみよう」と歴史的背景の説明からの始まりました。

濱田：当時アメリカに住んでいたフランス女性の共存と疎外感を追うことは、児嶋さんたちの異文化理解を進めることとつながりがあると思います。時代背景としては、1700 年代のフランスの貴族女性は、労働しないことがステータスシンボルであったと言えます。洋服作りでは特定の女性に専属の仕立て士がいました。髪結士もいて、マリーアントワネットは、蚤色の髪を好んだと言われています。髪型は鬘を結い、服とのバランスと取るように選択したとも言われています。鬘の髪の毛は成功した先祖の髪を保存しておいたとも聞いています。1794 年には大ブルジョアジー支配の時代が終わり、アメリカへの移住を決めた貴族達も出てきます。ファッションの伝播の方法としては、流行している洋服を着せた人形が送られることもありました。

河原林：女性ふたりの書簡からはふたりの気持ちの伝達があるとは見えない。社会的にどうみられるかと言うことは気にしているのだろうか？アメリカ社会がフランスのファッションを要求しているのだろうか？

濱田：ヨーロッパの人々が植民地時代に、アメリカ大陸に移住してくる時は、本国のスタイルでやって来たが、その後、アメリカではどうなっていったか？本国志向でヨーロッパのミニチュア版を作る街もあり、南部では暑くても服を脱がないということもある。

河原林：イギリス志向の人々ですか？

濱田：ヨーロッパの植民者のなかには、イギリス志向の人々が 8 割くらいいたのではないかと思われます。ヨーロッパ志向の傾向は 20 世紀に至っても続いており、ようやく 1930 年代の世界大恐慌の時になって、フランス製品が入ってこなくなり、アメリカン・スタイルの誕生を見たのですね。

亀田：日本では明治維新ですっぱり前を否定し、後の世へと移行を進めた。それ以前に信長は靴をはき、ポルトガル人は今まではかまをズボンとしていた。

河原林：それでもひとり、浮いていたわけではないだろう。

亀田：キリスト教を日本に入れたのは早いがその後鎖国があった。

児嶋：南米は本国指向で、ブラジルなどにはドイツ人の街もあり、建物もドイツ形式のみで作られていたりする。

亀田：ベトナムにも日本人街もあるが、日本人の場合はその土地に影響を受けている。

濱田：最近のファストファッションは安ければいいという風潮で、日本の着物もほとんどが成人式や卒業式や結婚式のような特別の時しか着られなくなっている。若い人や外国の人も借りて来て歩くのが流行っているが、ほとんどがぺらぺらの化繊である。

亀田：浴衣も外国人に人気があるが、安いのは中国で生産されているようだ。

濱田：河原林さんの最初の質問に戻るが、アメリカに移住したデュポン婦人は、夫が婦人にリクエストされてパターンなどを持って帰ってきたと書簡に書かれている。フランスのファッション大革命後の総裁政府時代(1795 年～99 年)に誕生した風変わりなニューモードであるメルヴェイユーズ（Merveilleuses）とは、古代調衣裳を大胆にまとった新興ブルジョアジーの女性グループを指すが、前期（1795~1804 年）と後期（1805～1817 年）に分かれる。ふたりのファッションの情報源の大半はデュポン婦人で、マニゴー婦人からの書簡で「今、フランスで大変風変わりな服装が流行していると聞きました。それは本当ですか？」とある。「メルヴェイユーズ」という言葉も伝わっていない。しかし、実際にはこのファッションがリアルにどう伝えられたかは文字を介してしかわからない。

河原林：パリコレとか言ってときどき話題になるが、そのころからのなごりだろうか？

濱田：アメリカの現代のデザイナーもオートクチュールもカジュアルな服も作るが、アーノルド･スカージーというデザインナーのショー向けのオートクチュールの服の裏を見ると縫製が悪い。1930 年代以後はアメリカ的なファッションが伸びて来たがフランスファッションと並べて飾ることができないような作品が多い。

　ふたりの女性の書簡には帽子やヘアスタイル、アクセサリー、マント、ストッキング、ショール、スペンサー(ジャケット)、コートなどの内容も含まれている。彼女たちはアメリカに移住しても、裕福でゆとりがあるからこそ、書簡でファッションについて語り合い、懸命にフランスの流行を追えたのであろう。既製服のメールオーダーのきっかけも作っている。

このような通常とは変わった内容でのセッションとなりましたが、セッション後は参加者全員に知らなかったことを知り得たという充実感が溢れていました。次回の服飾講座が楽しみです。

（文責　児嶋きよみ　校閲　濱田雅子）

濱田雅子の服飾講座

「服飾から見た生活文化」シリーズ　その９

日時：2016 年 6 月 25 日（土）　1:30～4:00

場所：ガレリアかめおか　３階第４会議室　　参加費：　600 円

〒621-0806 京都府亀岡市余部町宝久保１－１ Tel 0771-29-2700

タイトル：19 世紀アメリカ、ローウェル工場の女子労働者の日々と衣生活

講座のご案内

産業革命の原動力となる繊維産業はアメリカ合衆国のニューイングランドを中心に発達しました。フランシス・C・ローウェルは、1813 年から 14 年にかけて、マサチューセッツ州ウォルサムに機械織機を導入し、アメリカではじめて紡績と織布を同時に行う繊維工場の操業を開始します。ボストン生まれのローウェルは、1811 年、健康のため、イングランドとスコットランドに航海しました。イングランドで工場を訪問中に、そこで使用されている力織機に感動し、彼は頭の中に力織機の構想を思い浮かべて、マサチューセッツに帰国しました。当時はイギリスの法律によって、織物産業に関するいかなる情報の輸出も禁止されていたため、ローウェルは何も書き留めることができませんでした。彼はボストンに帰り、莫大な記憶と数学的な知恵を駆使して、力織機の再発明に着手し、原型の英国モデルを若干改良したものを設計したのです。ローウェルは、1813 年に出資者を募って、ボストン工業会社を設立し、翌年、彼が設計した機械織機を職人のポール・ムーディーに依頼して完成させました。

ローウェルの町はボストンの北西に位置し、人口は 1830 年で 6,474 人、1840 年は 20,796 人と 10 年間に 3 倍以上も増加していました。この町には木綿製造会社４、毛織物製造会社１、その他帽子、石鹸等の工場が存在しており、この時の木綿・毛織物製造会社の労働者は 3,226 人でした。また 5 階から 7 階建ての巨大な赤レンガの工場をはじめ、学校、教会、小

物や婦人用の帽子を売る多くの店があり、監獄、病院、劇場以外、旧世界の都市にある建物はなんでもある町といわれていたのです。

ローウェル工場の寄宿舎は、工場の立地が人口集中地域から外れていたという必要性から設置されたのですが、同時に工場が若い娘たちを道徳的に堕落させるものではないという宣伝効果もありました

ローウェル工場における労働環境や労働条件には種々の問題がありました。“Lowell Offering”は女工たちの執筆・編集による雑誌です。1840 年から 1845 年に出版されたこの雑誌には、フィクションの形式で綴られた手紙や詩やエッセイが含まれています。そこでローウェル工場における労働環境や労働条件について、お話させていただくに当たって、Shirley Gifford によって書かれたフィクションの手紙を参加者の皆さんとご一緒に読んで、ディスカッションをしたいと思います。 英文の手紙文は、後日、お届けします。皆様のご参加をお待ちしています。

参考文献　濱田雅子著『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009）第 5 章

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

参加者（敬称略）：谷紀子、村上洋子、濱田雅子、児嶋　4 名

今回は、前夜に京都市、亀岡市には大雨警報が出て、開催が危ぶまれていましたが、朝には何とか回復し、曇り空の元で始まりました。今回は、ガレリア 3 階の市民活動推進センター会議室で、空の様子がよく見えました。

濱田雅子先生との服飾講座「服飾から見た生活文化」シリーズは 9 回目になります。大体 1 年に 3 回程度の開催をしてきたので、始めてから 3 年以上は経過しています。今回も多くの資料がありました。

1．「19 世紀アメリカ、ローウェル木綿工場の女子労働者の日々と衣生活」の概要
2．パワーポイントでの説明資料
3．ローウェル木綿工場の規則と工場の寄宿舎の規則(英文)
4．『新版　あぁ野麦峠―ある製糸工女哀史―』『続　あぁ野麦峠』山本茂美著(角川文庫)からの抜粋資料

５．ローウェル工場と野麦峠との比較
６．規則（英文）の打ち直し版(児嶋)
７．世界史年表（1830 年代のアメリカ・ヨーロッパと日本）(児嶋)

濱田先生の提案で、講演形式ではない、参加型で開催をという意見をもとに、資料の読み込みも参加者全員が一人づつずつ読みながら始まりました。

参考文献：『アメリカ服飾社会史 』(2009)濱田雅子, 東京堂出版, p137-152

「アメリカにおける産業革命の原動力となった繊維産業はニューイングランドを中心に発達した。ローウェル木綿工場は、フランシス・C・ローウェルがアメリカ東部マサチューセッツ州ウォルサムに 1813 年から 14 年にかけて自動織機を開発し、アメリカ初の紡績と織布を同時に行う繊維工場の創業を開始した。『ローウェル・オファリング』(1840-45 年刊行）は女工達が執筆・編集した雑誌であり、この中のフィクションの手紙から女工達の生活を取り上げていく。」

＊生活の中のベルに支配されている（13 時間労働/日）7:00p.m.まで
1853 年 9 月 21 日の契約書には、一日平均 11 時間と記載あり
仕事開始時間：6：30
朝食時刻：7：00
仕事終了時刻：6：30(土曜夕方は 4：30 など)
＊賃金：出来高制で週毎に異なる。週 72 時間労働で 3.5 ドル
＊工場環境：室温が高く、毛羽が充満していて咳が出る
＊食事：昼食は量が多いが充分な食事の時間がない
＊水曜夜の学習会(50 セント)　大学教授の講義を聴く
＊日曜：教会での礼拝の要求と買い物

ローウェル木綿工場の規則（英文）について
＊会社との雇用契約である
＊監督の職務と仕事を休む場合の報告の義務
＊支払いは毎月最後の土曜日に集計され、次の週に支払われる
工場の寄宿舎の規則
＊寄宿舎に入る義務
＊安息日の礼拝の義務
＊12 ヶ月間の雇用。12 ヶ月に満たない者には解雇状は出してもらえない。

女子労働者の服装

1840 年代終わり頃の写真から（ロ絵 10）。作業着は自分で作った：半袖ドレス（コットン製・黒色・機械に巻き込まれないように袖が短い。安息日には当時、流行のおしゃれな衣服で買い物に出かけた。

日本の「野麦峠」時代の女工哀史との比較

参考文献：山本茂美著『新版　あぁ野麦峠―ある製糸工女哀史―』『続　あぁ野麦峠』（角川文庫）

「明治 42 年（1909 年）11 月 20 日午後 2 時、野麦峠の頂上で一人の飛騨の工女が息を引きとった。」

“ああ、飛騨が見える……。”厳しい冬将軍があたりを蔽い尽くそうとする頃、野麦峠の頂上でみねというという名の製糸工女が、小さく呟きながら死んだ。口へらしのために岡谷の製糸工場へ出稼ぎに行き、病のため貧農の実家へ連れ戻される途中だった。苛酷な労働と折檻に耐え、流行の赤いリボンとも無縁の青春を過ごしたみねが見つめていたものは何か……？

明治政府が強力に推し進めていた、富国強兵政策を底辺で担ったのは、無数の女工たちであった。これは彼女たちの青春に捧げる哀歌であるとともに、数百の聞き書きによって浮き彫りにした素顔の日本近代史である。戦後ノンフィクション屈指の名作/

（本書裏表紙より）

勤務状態：朝 4：00 ころから夜 10：00 ころまで
盆と正月以外に休みなし
13 才ころから 20 才前後まで

賃金：優良工女は 1 年間で家が建つ・土地が買えるほどの給料をもらえた
一方、出来高制・罰金制度もあった。

セッション開始

児嶋：この比較を見るとアメリカの女工史は 1840 年代で、かなりの人権意識があるように見られる。日本の野麦峠の話は、1909 年あたりの事象であり、60 年後くらい後である。1840 年の日本はまだ江戸時代であり、明治維新は 1868 年である。この日本の遅れは著しい。一方でアメリカはすでに奴隷制度に深く関わっている。

濱田：1776 年にアメリカの独立宣言をしたトマス・ジェファーソンは 600 人の奴隷を父親から相続している。労働条件なども会社との契約を交わして公開しているアメリカもその中に黒人は入っていなかった。トマス・ジェファソンは、黒人は「オランウータンと人間のあいのこ」と見ていて白人のみが人権を持つという考え方であった。

濱田：食事もアメリカの場合、かなりの量であり、食べる時間が足りないと言っている。
　一方、日本の場合は朝は麦飯・みそ汁で昼はひじきで夜はおにぎりかさつまいもとなっていて差が大きい。

谷：週に一回の休みも保証されている。キリスト教の安息日に教会にいくようにと言われているが。

村上：日本の女工にも階層があって、富岡製紙工場の女工は武家や官吏の娘達で、いわば当時のエリート女性や上層の娘達だったのです。この違いをしっかり見なければならないと思います。

濱田：それはとても重要な視点ですね。『富岡日記』に書かれた記録を読むべきですね。本レポートに女工の階層に関する補足をしました。

村上：ところで、今回の英国の EU 離脱も、ひとつの理由は、東欧などからの移民の多さに対する反発でしたね。

児嶋：英国の歴史を見て行くと、植民地を作り、その地の未開の人々に文明をと言いながらその地の産物を英国に向け送り、人々を奴隷化して行きました。その地の人々は英国にたくさん住んでいるのに、その人達のことは言えないので、EU に残留するとその中にある東欧諸国からの移民が増加するというので反対と言っているが、真実ではないと思う。
　離脱を推進している人々のインタビューには、アジアやアフリカの顔の人々は登場していない。「境をはずして」という時代と逆行しているように見える。「大英帝国（British Empire）だから」などと、漫画のように答えている人がいて、全員白人であった。

村上：この講演での資料を見るとアメリカの人権という点での進歩が見られ、日本との差も大きいが、実際に百数十年後の現在を見るといろいろな矛盾があり、それが解消されていないことが見えてくると言える。

補足（濱田）

富岡製糸場の工女は武家や官吏の娘達で、いわば当時のエリート女性や上層の娘達だったのです。このため没落士族の救済措置ではなかったと思います。

これに対し岡谷の製糸場の場合、諏訪郡の製糸工女の供給地は農業地帯であり、とりわけ「地主小作関係が全国水準なしいはそれ以上に展開しているか、さもなければ岐阜県北部＝飛騨のように農業生産力がきわめて低い」地方であったこと。

特に工女の出身農家の圧倒的な部分は小作農および非常に零細な耕地を所有する小自作農に属していたこと。

この意味において、農村社会を支配していた地主制度は労働力の面において製糸業の発展と密接に結びついていた、特に収穫の５～６割にも達する高率小作料に圧迫されていた

小作農は貧困な家計を補う目的で、または高率小作料を支払う手段を得るためにも娘を製糸工場に就労させたのである。

そして、地主制度により圧迫された農村の貧しさも、製糸業の劣悪な労働条件の存在及びその引き下げを可能にしたといってよい、といえます。

確かに熟練工女は貴重だったかも知れませんが、幾らでも補充のきく消耗品扱いだったのかも知れません。

今回の配布資料から約定証の内容を紹介します。

また雇用契約の面では 1895 年（明治 28）年に結ばれた雇傭契約を例に取ると

第１に、雇傭契約は双務契約（合意契約）ではなく、工女側の一方的な誓（約定）という形式をとっている。

特に工場主の義務（賃金の支払いの義務を含めて）については一切言及されていない。

そして契約当事者は工女自身ではなく、工女の父兄（戸主）である。

第２に、約定の基礎は工女の労働に対応する賃金の支払いではなく、戸主が受け取った約定金（手付金）である。

第３に、工女の義務は曖昧に規定され、拡大解釈の余地を残していた。

工女は就業するだけではなく、工場主の「家則」さえも「確ク相守」しなければならなかった。

そして契約期間中に工女は退職できず、とりわけ工女が就業できなかった場合、その代人を出すことも規定されている。

第４に、約定の違反の際に工女側が適当な損害金を負担することも規定されている。

ただし、上記の事例では倍率は不明であるが、甚だしい場合は約定金の 20 倍の損害金を弁済させるケースすらあった.

要約すれば、この契約書にみられる製糸労働者は自由な賃金労働者というよりも、むしろ労働によって前貸金を返済するために工場主に縛られていた労働者であったといってよい、とあります。現代の契約の概念からはほど遠いものでしょう。

一方は頼まれて就労した武家や官吏の子女（当時のエリート女性や上層の女性）、他方は貧しさ故に就労しなければならず、しかも前借金に縛られていた貧農の娘達。

待遇に大きな格差があるのは当然だったと思います。

（文責　児嶋きよみ　校閲　濱田雅子）

濱田雅子の服飾講座

「服飾から見た生活文化」シリーズ　その 10

日時：2016 年 11 月 20 日（日）　1:30～4:00

場所：ガレリアかめおか　3 階第 4 会議室　　参加費：　600 円

〒621-0806 京都府亀岡市余部町宝久保 1 － 1 Tel 0771-29-2700

タイトル：19 世紀後半北アメリカ西部開拓時代の衣生活 ーミネソタの大草原の小さな家を訪ねてー

講座のご案内

ヨーロッパの服飾文化が気候･風土など環境の異なるアメリカ大陸にどのように移植され、アメリカ的土壌において、どのように変化・発展を遂げ、20 世紀に至って、誰がいかにしていわゆるアメリカンモードを生み出し、築き上げていったのか、また、先住アメリカ人の服飾文化やテキスタイル文化の背景と特色は何か、アフリカン･アメリカンの人々の服飾文化やテキスタイル文化の背景と特色は何か、先住アメリカ人やアフリカン･アメリカンの服飾文化やテキスタイル文化は、ヨーロッパからの植民者にどのような影響を及ぼしたのか、西部に移住した開拓民の衣生活の実態など､実際には実に膨大な興味深い研究課題が服飾研究者の目の前に歴然と存在しています。

濱田はこのような問題関心のもとに､17 世紀から 20 世紀にかけてのアメリカ服飾社会史の分野の研究に 1981 年以来、携わってきました。それらの研究は上流階級から下層階級にわたる服飾社会史を成しています。

そこで本セッションでは､従来の拙著において十分に解明できていない北アメリカ西部開拓時代の女性の衣生活をミネソタの事例を取上げ考察したいと思います。ローラ･インガルス･ワイルダーの『大草原の小さな家』シリーズに描かれたようなフロンティアにおける自給自足の生活実態を女性の衣生活の視点から､さらに具体的に解明してみたいと思うのです。

19 世紀後半に北アメリカ中西部のミネソタに移住した女性たちの衣生活を、先行研究と衣服の実物調査に基づいて考察します。まず、ミネソタの歴史的背景と気候・風土、およびミネソタへ移住した人々の民族的背景、男女の構成および職業について述べます。次に当時の移民女性の衣生活を階級別に考察します。上流階級はヨーロッパの衣裳を踏襲していたの

で、ここでは詳しく扱いません。未開拓の研究分野の中流階級の女子服に注目し、女性の衣服の貴重な実物を University of Minnesota の Goldstein Museum of Design の収蔵品から紹介・分析し、当時の衣服デザインおよび生産技術のあり方を検討します。最後にスウェーデンからの移民の Anna Pers_dotter Larson が製作した男性用のシャツとパンツの実物を Minnesota History Center の収蔵品から紹介・分析します。以上により当時の移民女性の衣生活の一端を紹介し、当時の庶民の生活について、参加者の皆様とディスカッションを楽しむ機会になればと思っています。

（文責　濱田雅子）

講座のレポート

参加者（敬称略）：近藤正、船越茂、亀田博、谷紀子、小谷けい子、濱田雅子、児嶋きよみ
7 名

自己紹介

谷紀子：アメリカ服飾社会史研究会会員で 19 世紀の女性がズボンをはき始めたころを研究テーマにしています。「大草原の小さな家」という本が好きでした。

小谷けい子：アメリカ人の友人２人と来る予定だったのに来れなくて残念です。今までの知識に加えて学べることが楽しみです。小学校の非常勤講師で外国につながる子どもの指導にも関わっています。

船越茂：濱田先生の講座は２回目で、Global　Session は１年ほど休んでいましたが、久しぶりにアメリカの服飾がテーマで興味を持ちました。小学校の３年生の時にはじめてジーパンをはいて解放感を感じたことを覚えています。日本にジーパンが伝わったのは、西部劇からと思います。

亀田博：大津市から来ています。「大草原の小さな家」はテレビでリバイバルしていたような気がします。その時の子どもが大きくなっていてびっくりです。今はアメリカ大統領選で移民阻止のようなことを言っていますが、昔は皆移民だったはずで、そのころの様子も知りたいと思います。

近藤正：亀岡出身で GS は参加していますが、濱田先生のゲストの講座ははじめてです。繊維機械メーカーで仕事をしていて退職後水彩画をやり、秋は展覧会などでとても忙しいです。アメリカ東部のテキスタイルの会社を訪問したことを思い出します。

本報告では 19 世紀後半に北アメリカ中西部のミネソタに移住した女性たちの衣生活を、先行研究と衣服の実物調査に基づいて考察した。まず、ミネソタの歴史的背景と気候・風土、およびミネソタへ移住した人々の民族的背景、男女の構成および職業について述べた。次に当時の移民女性の衣生活を階級別に考察した。最初に 19 世紀のミネソタの上流階級の女子服を Suman Anantha Shenoi, *Women's Costume in Minnesota during Nineteenth Century*, Master's Thesis, University of Minnesota, 1967 に基づいて紹介・考察した。次に、中流階級の女性の衣服の実物を University of Minnesota の Goldstein Museum of Design の収蔵品から紹介・分析し、当時の衣服デザインおよび生産技術のあり方を検討した。最後にスウェーデンからの移民の Anna Pers_dotter Larson が製作した男性用のシャツとパンツの実物を Minnesota History Center の収蔵品から紹介・分析する。以上により当時の移民女性の衣生活の一端を明らかにした。

ミネソタへの移住者の社会的・地理的出自について、Suman Anantha Shenoi の研究に拠ってまとめた。

ミネソタの名前はネイティブ・アメリカンのダコタ族の「空の色に染まった水」を意味する言葉から取られている。元々はアメリカ・インディアンのオジブウェ族やダコタ族が居住していた。1659 年に、フランスの貿易商達が、この地域に現れ始めた。ヨーロッパ人達が最初に移住してきた地域は、現在はアンティークの町 スティルウォーター市として知られている。ミネソタ川とミシシッピ川の合流点に作られたスネリング砦は、州内にアメリカ軍が駐留した最初の場所の一つである。現在は歴史記念物として、観光・教育の場となっている。1849 年 3 月 3 日にアメリカの領土として編入された時点では、ミネソタは後にノースダコタ州とサウスダコタ州となる領域を含んでいた。ミネソタが 32 番目の州として現在の形になったのは、1858 年の 5 月 11 日である。

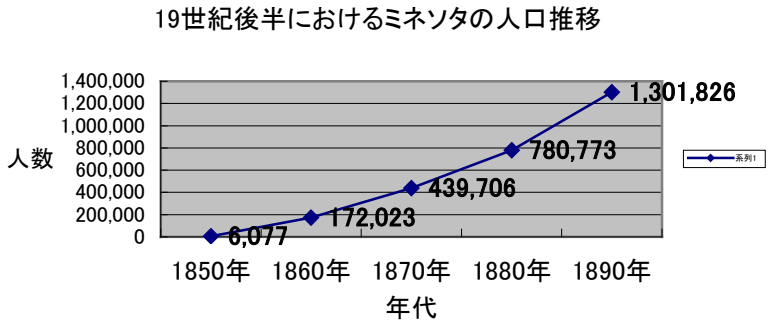


図 1　19 世紀後半における移民の人口推移

図 1 からミネソタの人口は 1850 年から 1890 年の 40 年間に 214 倍に増大したことが分かる。1850 年から 1860 年の 10 年間に 28.3 倍、1860 年から 1870 年の 10 年間に 2.56 倍、

1870 年から 1880 年の 10 年間に 1.59 倍、1880 年から 1890 年の 10 年間に 1.86 倍に人口が増加したのである。

	1850年		1860年		1880年	
男性	3695	61%	91704	54%	419149	54%
女性	2343	39%	77691	46%	361624	46%
合計	6038	100%	169395	100%	780773	100%

図 2　ミネソタへの移民の男女構成

図２から男女の割合は 1850 年には 6 対 4 であったのが、1860 年から 1880 年には 5.4 対 4.6 に変化しており、女性の人口の増大が読み取れる。

1870 年代のミネソタへの移民はドイツ出身者が 24%、ノルウェー出身者が 22%、アイルランド出身者が 14%、スウェーデン出身者が 13%、カナダ出身者が 9%、その他の国の出身者はそれぞれ４%以下である。

外国からミネソタへの移住理由は何であったのか？Drenning Holmquest 編の“They Choose Minnesota, A Survey of The State’s Ethnic Groups” によってまとめる。

本国における人口増加、産業革命、農業システムの変化が多くの土地のない労働者を生み出し、多くの国において農業危機を引き起こした。また、政治的不平等、社会階級の階層化、国家の教会独裁に対する反逆、直接的な迫害（例　東欧におけるユダヤ人迫害）、および義務兵役は外国からミネソタへの移住の牽引車となったのである。

西部開拓の牽引車となったのは先買権法（Preemption Act）、およびホームステッド法（Homestead Act）である。前者は南北戦争前の米国で、公有地の測量より以前に入植した者が、その土地の売却に際して最も優先される権利である。このような入植者はスクウォーター（squatters）と呼ばれ、無法者扱いされたが、1801 年から 41 年までの間、彼らはこの権利を主張して連邦議会で 19 の法を成立させ、入植地の法的所有権を確立することができた。これらの法律は南北戦争中に成立したホームステッド法（Homestead Act）に取って代わられるまで続いた公有地処分上の重要な法律であった。（アメリカ史事典　597 頁）

西部の歴史において土地投機欲は終始人々を西漸運動にかりたてるエネルギーになっていた。「自営農地（ホームステッド）法（1862 年）」が成立したことで、西漸運動の頂点を迎えた。ホームステッド法とは一家の長、または 21 歳以上の合衆国市民に、5 年間の居住と農地整備を条件として、公有地 160 エーカー（約 65,000 ㎡）の無償供与を定めた公有地政策の一つである。土地投機で利殖をはかる有産者やそれを専業とする土地業者はもとより、一般の農民や町の住民も、常に土地の売買による利益を念頭において定着と移住を繰り返した。特に荒野を最初に切り開く開拓農民は、開拓地に定着して、農業を営むことよりも、開拓して一応農業としての体裁を整えた土地を、あとから来る農民に高く売って利ざやを稼ぐことの方に強い関心をもっていたようである。

初期の植民者たちは、ニューイングランド出身であり、少数の人たちが近隣諸州からのスカンディナヴィア人であった。これらの人々は急速に成長しつつある州で、ただちに仕事を見つけた。多くの人々は鉄道産業とミネアポリスの製粉工場でも仕事を見つけた。木材伐採夫は常に歓迎され、良い賃金が支払われた。数家族が大都市から奥地へ移動し、土地を耕作した。多種多様な穀物が 1871 年から 1874 年における害虫による穀物のひどい破壊にもかかわらず、見事に育った。

では、ミネソタへの移住者はミネソタでどのような職業に就いたのか？

1860年における移民の職業は靴屋が44%、男性の仕立て師が23%、女性の裁縫士が13%、帽子屋が 10%、女性の仕立て師が 5%、宝石商が 4%、衣服商が 1%であり、衣服や帽子の生産に携わっていた技術者が 56%であった。ミネソタではすでに 1860 年代から、靴や衣服や帽子の生産が盛んであったことが明らかである。外国からの移民は製材業や農場労働や衣服生産に携わっていた。

報告者はミネソタにおける家庭裁縫に興味を持ち、2007 年 3 月末に、大学の春休みを利用して衣服の実物調査に現地にでかけた。そして幸いにも 3 月 28 日、ミネソタ大学のゴールデンシュタイン・ミュージアム・オブ・デザイン Goldenstein Museum of Design の所蔵品から 14 点の中流階級の女性の衣服の実物を調査させていただいた。その内訳はウェディング・ドレス　３着、日常着（ドレス　２着、ガウン、ラッパー　３着)、子どものドレス１着、ウェディング・ドレス、又は外出着　3 着、日常着（ドレス）2 着である。これらは報告者のために特別に一同に会して勢揃いして大学の研究室のハンガーにかけられていた。この光景を目の当たりにしたときには、一抹の感動を覚えた。そのときの「あっ、これだ」という感触は今も忘れない。

写真　1

上　写真　2　　下　写真３

手縫いの自家製の衣服も見られ、特に家内で着用する衣服は手紡ぎ、手織り、手縫いによる手作りが行われたものである。縫製はプロ的なものと素人的なものが見られた。デザインはカートリッジ・プリーツ（袖、ウェスト）やパイピング（袖、ウェスト、ヨーク）が特徴的で、ボーンが挿入されているものが多いのは、特に印象的であった。

写真(1－3)は家庭裁縫で作られた流行のドレスである。稚拙ななかにも精一杯流行についていこうとする制作者の心行きが感じ取れる作品である。パイピングやカートリッジプリーツは技術的に大層高度なものが要求される。この写真に見るように、当時はこの二つのテクニックがハイファッションには勿論、一般の中流家庭の女性の衣服にも取り入れられていたのである。

ローラ・インガルス・ワイルダーの家族がカンザスから移住して暮らしていたプラム・クリークを訪れた際に撮影した写真の紹介・解説も行った（口絵 11）。

次に紹介したのは、スウェーデンからの移民の女性アンナ・ペール・ドッター・ラールソン Anna Pers_dotter Larson が作った男性のプルオーバーである。この貴重な衣服はミネソタ歴史センターの所蔵品である。調査日は 2007 年 3 月 27 日である。

遺品の紹介に先立ち、アンナがスウェーデンから移民してきた背景に目を向けてみた。報告では、この部分は簡単に触れたので、以下にその詳細をまとめる。

アンナ・ペール・ドッター・ラールソンは 1836 年にスウェーデンのダラルナ・プロヴィンス Dalarna Province のエルヴダーレン Elvdalen に生まれた。彼女は 1870 年に 34 歳でセール・ラールス・ラールソン Söl Lars Larson と結婚した。Lars は 20 歳であり、彼女より 14 歳若かった。アンナはスウェーデンで 2 人の娘を産んだ。アンナは 1874 年に、メアリーは 1876 年に生まれた。彼らはモラ Mora 湖の近くの農場に住んでいた。ロマーナ・ネルソン Romana Nelson はスウェーデンにおけるこの家族の足跡をたどってみたが、結果は得られなかった。

1882 年に、ラールス Lars とアンナ Anna は娘たちを連れて、ゴートボルグ Goteborg からボートでスウェーデンを立ち、エリス島 Ellis Island を通って、アメリカ合衆国のミネソタへと移住した。ラールス Lars の二人の兄弟のエリック Eric とオール Ole は 1 年前に移住してきていた。3 人の兄弟はスタンチフィールド・タウンシップ Stanchfield township の農場を分け合った。アンナと彼女の家族は、最初、エリックとオールの農場の北の 40 エーカーの丘にある小さな原始的な住居に住んでいた。1895 年から 1900 年の間のある時期に、彼らはこの家を捨てて、エリックとオールのもとへ引越しをした。レイモンド Raymond は子供時代に、この家が壊されたことを記憶している。エリックはメアリーと結婚して、5 人の子供をもうけた。オールは一度も結婚しなかった。

アンナの末娘のメアリーは近所の男の子のチャールズ・エリクソン Charles Erickson と結婚した。彼はほんのわずかの土地を所有しており、この土地の小さな湖と川のほとりで製材工場を操業した。1900 年の統計によると 64 歳のアンナと 50 歳のラールスは娘たちと義理の息子と一緒に、エリクソンの農場に引越しをした。彼らはこの農場で余生を過ごしたよ

うである。アンナは 1919 年に亡くなった。彼女は大勢の近隣の人々や親戚の人たちと並んで、スタンチフィールド・バプテスト教会 Stanchfield Baptist Church に埋葬されている。教会記録は火事で焼けてしまった。

それゆえ、織り手のアンナ・ペール・ドッター・ラールソンについてはあまり知られていない。彼女がアメリカに着いたときは、すでに 46 歳であった。レイモンドが生まれたときには、アンナはもうすでに 62 歳なっていたが、彼はアンナのことを覚えていた。彼の記憶では、アンナは年老いた、物静かな女性であった。彼女は決して英語を覚えようとはしなかった。だが、彼女は病人を扱うために、医薬品を用いる治療家として近所で知られていた。

アンナは彼女の羊を飼育していた。レイモンドは兄弟や従兄弟たちと羊の群れの番をしていたことを記憶している。農場労働者は羊の毛を刈り取り、ケンブリッジ Cambridge の梳毛工場に羊毛を届けた。アンナはケンブリッジで購入した紡車を用いて羊毛を紡いだ。

写真　4

写真(4)は彼女による手紡ぎ、手織り、手縫い、およびミシン縫いの長袖のプルオーバー・シャツである。前中心の袋縫いの手縫いを除いて、すべてミシン縫いである。襟と前中心に頭を通すホール状の開きがある。身頃は織物の一丈であり、肩で折りたたんで、両サイドを縫って、裾は長いスリットになっている。V 字型の開きは暗めの赤の木綿でパイピングされており、3 個のガラス製の白と茶色のボタンで留めあわされる。セットイン・スリーブの袖下には襠が入っており、カフスは赤みがかった縁つき 1 個の褪色した白いガラス製のボタンで留めあわされている。袖は元の素材の布片を用いて、丈を長くしてある。

仕事着は丈夫であるが、毎日着ているうちに擦り切れたり、穴があいたりしている。シャツは肩の上と袖口が一番よく擦り切れている。肩紐で手すきを用いる農夫は、これらの地域の衣服を磨耗させたものと推察される。

ここにその一着を紹介したアンナ・ペール・ドッター・ラ　ールソンのコレクションの 45 の遺品は、ミネソタの歴史における一人の女性の仕事だけではなく、19 世紀の転換期のスウェーデンの移民の経験をも反映している。アンナは彼女の古い衣服や布片を、お金をかけないで保存することによって、ミネソタの農場における日常生活史を私たちに残してくれたのである。

（文責　濱田雅子）

講座終了後に感想をメールで送っていただきました。(編集　児嶋きよみ)

2016 年 11 月 20 日 GS 感想集

近藤　正さん

浜田さま、11/20 は初めて先生のお話をお聞きしました。会社では染色機械　の設計に携わって来ました。織機で織られた布を、のり抜き精錬、漂白、染色、仕上げ加工（樹脂加工、仕上げ　セット　染め加工　etc,)する機械　をプラントで輸出して来ました。

輸出先は主に Cotton の産地、インド、パキスタン、ロシア、ウズベク、キルギス、カザフ、中国、インドネシア、アメリカなど、どこの国でも繊維加工　からはじめる為、色々の国を訪問しました。

お聞きしました服飾の歴史は又違った感覚でお聞きしました。ありがとうございました。

船越　茂さん

先日はありがとうございました。文化というものが、異なる民族の間に、どのように伝わっていくのかということに興味があります。

服装や食べ物や住まいの衣食住のほかにも娯楽や芸術など、範囲は広げればきりがありませんが。あるものは取り入れるが、あるものはかたくなに今までのものに固執する。
それが何によって決まるのだろうか、生活習慣、労働環境、そのもの自体の比較優位性･･･。
先生の研究をお聞きして、またまた興味がわいてきました。
なぜ、自分は１０歳くらいの頃からジーンズをはき、５０年以上たった今も、まだはいてるんだろう。ちょっと良い答えが見つかるまで、ジーンズはたたんでおきます。
つぎの機会を楽しみにしています。

亀田　博さん

11 月グローバルセッション　濱田先生の服飾講座　19 世紀後半 アメリカの開拓時代の衣生活のテーマ でしたが、 先住アメリカ人やアフリカン アメリカンの服飾文化やテキスタル文化は、ヨーロッパからの植民者にどのような影響を及ぼしたのか、大変興味深かったです。　ミネソタの移住実例が、わかりやすく参考になりました。 服飾の生活文化から、アメリカの風土、歴史、庶民の生活、上流階級から下級階級の生活なども分析することができ、実用性や機能性、防寒性などを供えた衣類が重要視されるようになったのだと思います。今回の講座で、当時のアメリカの大変貴重な文化や歴史を学ぶことが多かったです。次回も楽しみにしています。

小谷けい子さん

先日は、盛り上がっている最中、途中で退出してしまい失礼しました。
学生の頃、「モカシン」という靴がはやっていたので、ネイティブの人々が身につけていた衣服との交流に話が及んだ時はますます興味がわいてきたのですが、都合で帰らなければならず、後ろ髪を引かれる思いで部屋を出ました。続きを聞きたいです。

濱田先生が講義の中で、現地資料の大切さと提供された方々への感謝を何度もおっしゃっていたのが印象的でした。残された衣服の中からその時代に生きた人たちの生活や気持ちや社会の様子などを読み取ることができるのだということを具体的に教えていただきました。服の生地や縫い方、仕事の仕方などの説明を聞いていると、まるで物語のように聞こえてきて、昔読んだ本や映画のいくつかのシーンがいくつも思い起こされ、先生のお話とそれらがくっついて懐かしくそして感動していました。小さい頃から洋服やアメリカの生活については興味があったので、その頃の気持ちを思い出したような気がしました。

紹介していただいたドレスの写真は実に興味深かったです。新しい土地で生活を始めた女性達が、ヨーロッパのファッションを取り入れて縫った素敵なドレスの手仕事も魅力的でしたが、北欧移民の女性が作った素朴な野良着はとても印象深く、現代の服の原型のように思えました。今や大国となったアメリカは、ヨーロッパやアフリカ・北欧から新しい生活をはじめるために渡ってきた人々がネイティブアメリカンも含め文化も言葉も違う人々とお互いに情報交換しあい助け合いながら造りあげていった国であることを改めて知りました。

濱田先生のお話を聞いて、時間と効率に追われている自分の生活をもう一度振り返る機会にもなったように思います。有り難うございました。

あとがき

本報告集の編集を終えて、ふと思い起こしたのだが、思えば、私は 2012 年 1 月 2 日の午前 2 時に、脳内出血で倒れ、一瞬にして左半身が麻痺してしまったのである。目の前が真っ暗な状態で、とにかく、3 か月間、必死の思いで、リハビリに専念した。そして、3 月末に無事、退院するに至った。桜が咲き誇る 4 月から、大学の非常勤講師として、教壇に立ち、それから、4 年間、勤めながら、神戸・西宮と京都を拠点に、服飾講座を主宰してきた。倒れてからあと 2 週間で 5 年になる。この間、家族はもとより、病院、研究仲間、大学職員の皆さんに大変、お世話になり、感謝の念に堪えない。2013 年 10 月から本講座のために、4 か月毎にパソコンをカートに入れて、コロコロ引いて、神戸から京都に持ってゆくことが習慣になった。この報告集を製作する過程で痛感したのは、服飾の専門家ではない児嶋さんが、本講座のために実によく服飾史や歴史を勉強されたということである。案内文やレポートに専門的なことを一生懸命に書いて下さった児嶋さんには心から敬意を表したい。また、これまで本講座にご参加・ご協力いただいた皆さんに、心から御礼申し上げたい。

本講座は、まだ、19 世紀後半である。21 世紀に至るまで、道のりは遠く、研究課題が山積みしている。今後、引き続き、ジーンズの歴史、先住アメリカ人の服装やテキスタイル、アメリカン・カジュアルの誕生、ファスト・ファッションなどの興味深いお話をさせていただく所存である。今後ともよろしくお願い申し上げる次第である。

2016 年 12 月 16 日　　濱田雅子　記

濱田雅子の略歴

元武庫川女子大学教授。博士（家政学）。現在、アメリカ服飾社会史研究会会長。日本ペンクラブ会員。神戸大学文学部史学科で西洋史学を専攻。大学助手を務めたのち、服飾デザイナーへの転身を志し、アパレル業界でパターンメイキングと衣服製作に携わる。その後、丹野郁博士に師事し、西洋服飾史研究。著書に『アメリカ植民地時代の服飾』（せせらぎ出版、1996 年）、『黒人奴隷の着装の研究』（東京堂出版、2002 年）。『アメリカ服飾社会史』（東京堂出版、2009 年）、丹野郁監修『世界の民族衣装の事典』（共著、東京堂出版、2006 年）。主な翻訳書に P.F.コープランド著『アメリカ史にみる職業着』（せせらぎ出版、1998 年）、P.F.コープランド著『図説 初期アメリカの職業と仕事着』（悠書館、2016 年）。アルベール・ ラシネ原著『世界服飾文化史図鑑』（共訳、原書房、1992）。 J・ギロウ＆B・センテンス著『世界織物文化図鑑』（共訳、東洋書林 、2001 年）、第 16 回日本風俗史学会研究奨励賞受賞、他に論文や講演など多数。

児嶋きよみの略歴

福井大学教育学部卒業、有朋塾(中国語学校、大阪市)、北京外国語大学短期留学、ブラジルミナスジェライス連邦大学ポルトガル語集中課程、立命館大学大学院先端総合学術研究科博士課程在籍、京都府小学校教員(宇治市、亀岡市)、亀岡市教育委員会指導主事(非常勤)、オクラホマ州立大学京都校職員、亀岡市国際センター職員、亀岡市交流活動センター職員、NPO Office Com Junto 主宰、NPO 法人みんなのネットワーク理事。現在は、これに加えて、外国につながる子どもの学習言語支援とその外国人保護者の学習の場としての「ひまわり教室」を亀岡市内 2 箇所で開催。歌集『月のドナウ』（青磁社、2013 年）。論文：「英会話講座」から多文化交流の「場」へ. ―亀岡市におけるグローバルセッションの転換―. www.r-gscefs.jp/wp.../コアエシックス 11 号_07【論文】児嶋きよみ.pdf。論文：「生涯学習」の一環としての「国際化」の試み. ―亀岡市の姉妹都市交流とオクラホマ州立大学京都校誘致の事例を中心に―. www.r-gscefs.jp/wp.../04/コア・エシックス 12 号_07_【論文】児嶋.pdf。

濱田雅子の服飾講座「服飾から見た生活文化」シリーズ報告集（2016）
編集人　濱田雅子
印刷　2017 年 1 月 16 日
発行　2017 年 1 月 16 日
発行所・印刷所　　アメリカ服飾社会史研究所
〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中 5－1－521－1006
Tel & Fax 078-779-9268
E-mail　hamadakobe@kcc.zaq.ne.jp